

# VIEW21

ビュー21

2014

Vol. 1

小学版

## 特集

# 学びに向かう土台を築く 学級づくり

総論 文部科学省初等中等教育局視学官 杉田 洋

学校事例 福岡県宗像市立玄海東小学校 / 東京都品川区立小中一貫校 荏原平塚学園 /  
山梨県山梨市立日川小学校

私を育てた  
あの時代、あの出会い

東京都文京区立千駄木小学校校長 齊藤 純

Benesse発  
これからの教育

滋賀県草津市立玉川小学校 表現する力と聞く力を育むビブリオバトル

つながる  
学校と家庭の学び

埼玉県三郷市立前間小学校 「じぶんコントロールカード」で目標達成のスキルを身に付ける



## 特集

3 学びに向かう土台を築く  
学級づくり4 課題整理  
データから見る学級づくりの重要性6 総論  
小さな社会「学級」での集団活動を通して  
社会を生き抜くための力を獲得する  
文部科学省初等中等教育局視学官 杉田 洋10 学校事例1  
全員でつくり上げる学級活動で居心地の良い学校をつくる  
福岡県宗像市立玄海東小学校14 学校事例2  
子どもの課題を学力と意識の両面から捉え、学年体制で学級づくり  
東京都品川区立小中一貫校荏原平塚学園18 学校事例3  
プロジェクト活動の積み重ねで子どもと共に学級をつくる  
山梨県山梨市立白川小学校

## 特別レポート

30 小中高 教師が共に語り、オピニオンをつくる  
Teachers' cafe 第2回ワークショップ開催

## 連載

1 私を育てたあの時代、あの出会い

実践を認めてくれた恩師と出会い 価値付ける大切さを真に感じた  
東京都文京区立千駄木小学校校長◎齊藤 純

22 Benesse発 これからの教育

表現する力と聞く力を育むビブリオバトル  
滋賀県草津市立玉川小学校

26 つながる学校と家庭の学び

「じぶんコントロールカード」で目標達成のスキルを身に付ける  
埼玉県三郷市立前間小学校

32 読者のページ Reader's VIEW／編集後記

私を育てた  
あの時代、あの出会い

第16回

# 実践を認めてくれた恩師と出会い 価値付ける大切さを真に感じた

東京都文京区立千駄木小学校校長 齊藤 純 SATO JUN

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で子どもを育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、齊藤校長が語る。

自分を振り返り見つける力を  
子どもに付けたい

私が教師を志したのは大学院2年生の頃、学んでいた心理学を応用すれば学習指導が更に効果的に出来るのではないかと考えたからです。

小学校教員となり、心理学を生かして行った実践の1つに、子どもが自分の学習内容を決め、毎日取り組むということをしました。調べ学習や苦手教科の克服など、子どもそれぞれに学習内容はさまざまですが、私は「ここでつまづいているね。こうすればもっと良くなるよ」などの

コメントを、毎日書いて返却しました。この活動を「一粒の米」と呼び、どの学年でも行なったのです。

自分で課題を決め、その成果を振り返ることは、子どもにとって容易ではありません。しかし、子どもの将来を考えた時、心理学という「メタ認知力」、つまり自分の良さも弱さも含めて「振り返って見つける力」を身に付けることは、自分なりの価値観を持って生きていくために不可欠だと考え、取り組みを続けました。同時に、私は道徳の授業を通じて「自分を見つめる力」を付ける取り組みを行いました。しかし、当時は



さいとう・じゅん 専門教科は、道徳、生活科、総合的な学習の時間。大田区立久原小学校副校長、文京区立根津小学校校長などを経て、現職。東京都小学校生活科・総合的な学習教育研究会副会長なども務める。

1985 (昭和60)

新採として  
渋谷区立長谷戸小学校  
に赴任。道徳教育の  
研究を始める

1988 (昭和63)

品川区立第一日野小学校  
に赴任

1998 (平成10)

大田区立中萩中小学校  
に赴任

2002 (平成14)

大田区立  
入新井第一小学校  
に教頭として赴任

2005 (平成17)

大田区立久原小学校に  
副校長として赴任

2008 (平成20)

東京都教育庁  
人事部職員課  
課務担当副参事に  
着任

2009 (平成21)

文京区立根津小学校に  
校長として赴任



校長2年目の頃。  
移動教室に  
同行した時の写真

2011 (平成23)

文京区立千駄木小学校に  
校長として赴任

## 「迷い、悩んだ時に立ち戻る 教師としての柱をつくる」



心理学を授業に生かすという意識が学校現場にほとんどなく、周囲になかなか受け入れられませんでした。

どうすればこの良さが伝わるのかと悩んでいた時に出会ったのが、当時、校長を退職されたばかりの宮本朝子先生です。先生が主宰する「新しい教育を考える会」で私の道徳教育の実践を発表する機会をいただきました。宮本先生は発表を聞き、「道徳教育について理解が非常に深まった」と褒めてくださったのです。自分

の考えが初めて評価され、とても勇気付けられました。私は思いを認めてくれる場が見付かったと、月1回の会に参加するようになったのです。

当時、私はミドルリーダーとして課題のある学校に赴任し、校長と一緒に学校の立て直しを図っていました。しかし、周囲とかみ合わず、なかなか改革は進みませんでした。そんな時に支えになったのが、宮本先生の「自分から一番遠い人を大切にする」「難しいことをやさしく表現

できることが本当の力」という言葉です。当時の私は、自分と意見の異なる人には難しい言葉で論破しようとする攻撃的な面がありました。一方、宮本先生は、「自身の考えを具体的な言葉で分かりやすく伝えていました。意見が合わない人に対しては積極的に自ら声を掛け、その人々の良さや活躍の場を見いだして、自分との関係を築いていました。」

私は宮本先生を手本に、子どもの人生を考えた時にどういう力を付けることが本当に必要なかを、毎日のように先生方と話し合いました。粘り強く議論を重ねていく中で、周囲に厳しかった自分が少しずつ変わっていき、自分が変わることで、周りの先生方との関係も良い方向に進むようになりました。宮本先生は「教育は愛」とも繰り返しおっしゃいましたが、私は他者を丸ごと受け入れ、認める大切さを改めて学んだのだと思います。

### 教師一人ひとりの良さを 見取り、認め、伸ばす

実は「一粒の米」には後日談があります。苦手な算数に2年間取り組んでいた子に、成人してから会う機

会がありました。その子は「課題に取り組んだおかげで中学校では勉強が楽しくなり、今は看護師として働いています。先生のことを信じて頑張ったよかったです」と言いました。私の信念が伝わっていたんだ、続けてよかったですと胸が熱くなりました。

信念を持つこと、それが認められ、具現化できる場があること——校長となった今、私が大切にしているのは、教師それぞれが持つ力や良さを見取り、その価値を伝え、力を発揮できる場をつくることです。そのために、私が率先してネットワークを広げて、先生方を学びが得られそうな研究会に連れていき、その力を伸ばしてくれそうな人に引き合わせたりしています。

迷ったり悩んだりした時に立ち戻る、自分の柱があることは重要です。それをつくるため、私は一つひとつの実践に対して「何のために行うのか」と、自分にも先生方にも常に問い掛けています。自分で振り返り考える中で、本質をつかみ、真に自分のものにできれば、きつと次の指導に生きていくでしょう。私自身も、常にそうした姿勢で教育と向き合っています。

特集

# 学びに向かう 土台を築く 学級づくり

少子化に伴う集団活動の減少により、  
うまく人間関係が築けない子どもが増えたという声を聞く。  
また、学級経営の経験が浅い若手の先生の育成や、  
多様な価値観を持つ保護者への対応も学校全体の課題であろう。  
今号では、子どもたちがつながり、学びに向かう環境となる学級を  
どのようにつくっていくかを考えていきたい。

## 学級づくりに関する課題として挙げられた声

- 学級の問題を自分たちで解決しようとする意欲が低い
- 自分を認めてほしいという欲求は高いが、友だち（他者）を認めようとする気持ちが低い
- 話し合い活動が出来ない。他人との意見をすりあわせ、合意点を見付ける経験が必要
- 子どもと保護者の価値観が多様化する中での1つの学級づくりが難しい
- 若手教師が学級づくりの楽しい経験を十分持っていないため、どうしたら学級がまとまるかが分からず困っている

\*「VIEW21」小学版読者モニターアンケート（2014年2～3月実施）より一部を掲載

# データから見る学級づくりの重要性

先生と子ども、子ども同士が信頼関係で結ばれ、学級が安心できる居場所であることは、学習に取り組む環境を整えるという点でも重要であろう。  
その重要性を、ベネッセ教育総合研究所がこれまでに実施した調査データを基に改めて示した。

図1 子どもの友だちへの意識／小学4～6年生

● 友だちにより気を使う傾向に。性別による差は小さくなった

	小学生全体		男子		女子	
	2004年 (4240人)	2009年 (3561人)	2004年 (2172人)	2009年 (1814人)	2004年 (2062人)	2009年 (1745人)
友だちといつも一緒にいたい	81.8	85.3	77.9 <	82.9	86.1	87.9
違う意見をもった人とも仲よくできる	70.1	74.9	68.4 <	75.2	72.0	74.7
友だちが悪いことをしたときに注意する	60.0 <	65.3	57.6	62.2	62.4 <	68.5
年齢や性別の違う人と話をするのが楽しい	53.2	54.5	47.2	49.8	59.6	59.6
グループの仲間同士で固まっていたい	46.2 <	52.5	47.4 <	56.7	45.0	48.3
仲間はずれにされないように話を合わせる	46.7	51.6	44.6 <	50.4	49.0	52.9
友だちと話が合わないとき不安を感じる	46.9	47.0	42.2	44.5	51.9	49.4
友だちとのやりとりで傷つくことが多い	—	27.1	—	25.7	—	28.8

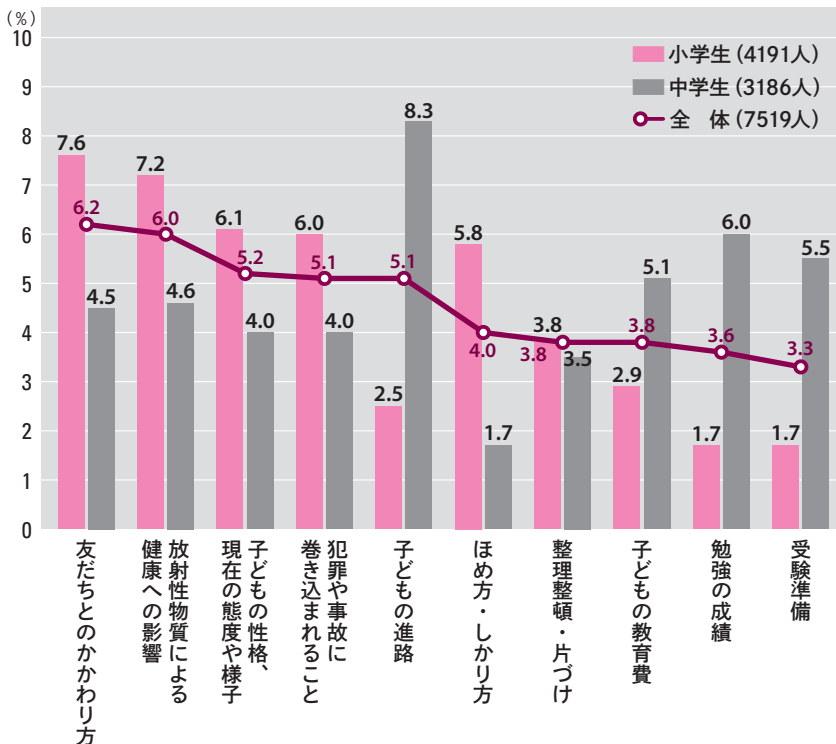
注1) 「とてもそう」 + 「まあそう」の%

注2) <>は5ポイント以上差があることを示す

出典／ベネッセ教育総合研究所「第2回子ども生活実態基本調査報告書」(2009)

図2 保護者が子育てにおいて1番気がかりなこと／学校段階別

● 小学生の保護者にとって子育ての最大の気がかりは、友だちとのかかわり方



注1) 38項目中から1つ選択。全体値の上位10項目を图示した

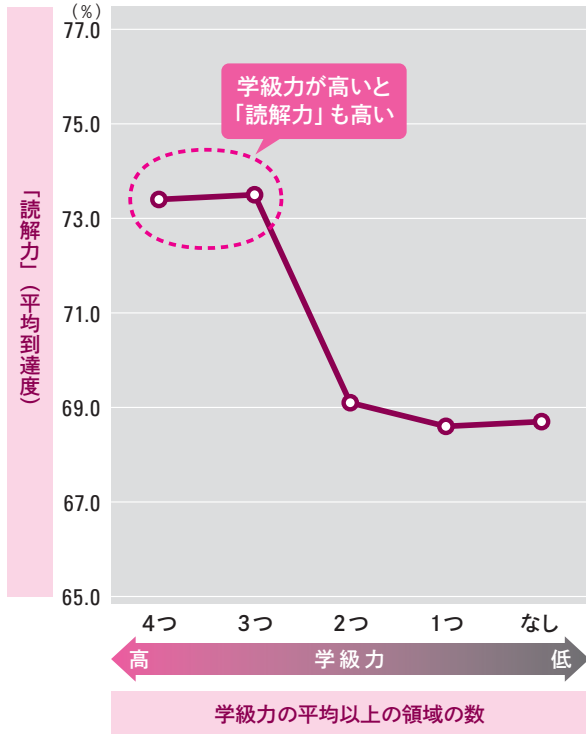
注2) ( )内はサンプル数

出典／ベネッセ教育総合研究所「第4回子育て生活基本調査(小中版)」(2011)

# 学びに向かう土台を築く学級づくり

図4 総合学級力と「読解力」の関係

●学級力が高いと「読解力」も高い

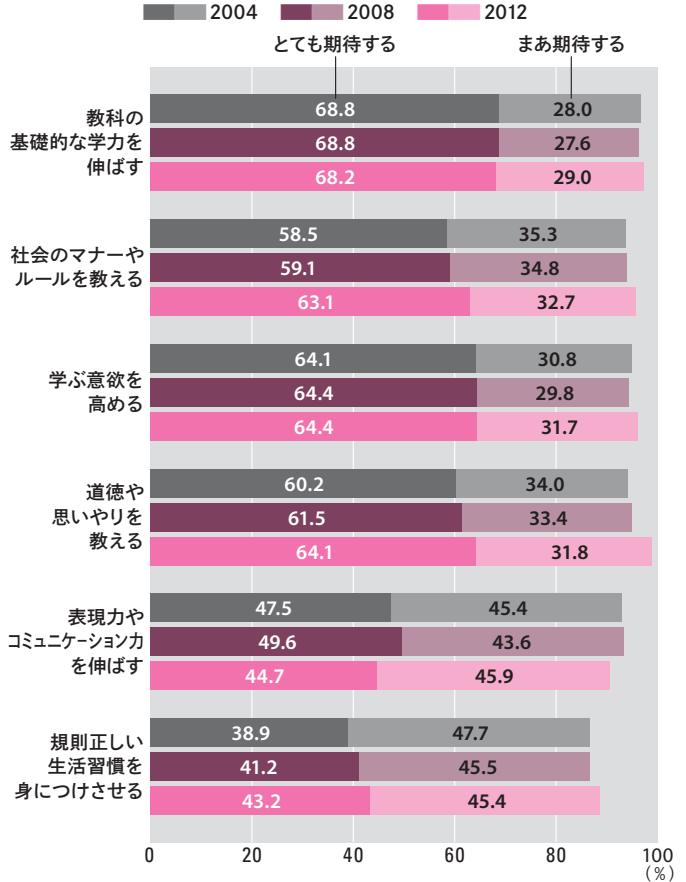


注1) 横軸は、総合学級力の4つの領域(目標達成力、創造的対話力、協調維持力、規律遵守力)の平均値を求めたとき、全体平均値以上であった領域の個数を示している

出典/ベネッセ教育総合研究所「『読解力』を育てる総合教育力の向上に向けて—学力向上のための基本調査 2006」

図3 学校に期待する教育/小学2年生と5年生の保護者

●正しい生活習慣や社会のマナーなどの定着も期待する保護者



注1) 全22項目のうち2004～2012年の経年比較が可能で、2012年の「とても」と「まあ」の合計の数値が高い6項目を示している

出典/ベネッセ教育総合研究所・朝日新聞社共同調査「学校教育に対する保護者の意識調査 2012」

## 編集部から

「友だちともっとうまくかかわれたらいいのに」——うまく思いを伝えられずに、友だちと衝突したり元気をなくしたりする子どもが増えていると、気に掛けている先生の声です。調査データを見ると、子どもは友だちと一緒にいたいと思う一方で、仲間はずれにされないよう話を合わせる傾向が強まり(図1)、保護者も子育ての最大の気がかりに「友だちのかかわり」を挙げています(図2)。また、地域によっては若手教師が増え、保護者の多様な期待(図3)を前に、学級経営に不安を抱く管理職の声もありました。全教科を担当の先生が1人で教えることが多い小学校では、全人格的な教育が出来る一方で、学級経営は担任の先生の資質に委ねられ、学校全体で取り組むのが難しいのかもしれない。取材で拝見した授業では、1人の子の発言を一生懸命に聞く姿やグループ活動で自分の意見を話したくて前のめりになる子の姿がありました。そして、そのような学級に共通するのは、安心して発言できる風土なのだと感じました。データでも、学級力の高さと読解力との相関が示されています(図4)。今回の事例では、子どもが力を合わせて取り組む活動や学級の雰囲気を目に見えるようにすることで、皆が同じ方向に向かって学級をよりよくしていく取り組みをご紹介します。これからの学級づくりのヒントにしたいだければ幸いです。

「VIEW21」小学版編集長 杉田美穂

# 小さな社会「学級」での集団活動を通して 社会を生き抜くための力を獲得する

文部科学省初等中等教育局視学官 杉田 洋ひろし

子どもは学校生活での大半の時間を学級で過ごすため、学級の風土は学校に対する意識や学習意欲に直結する。集団活動を通じた人間関係づくりなどに熱心に取り組む文部科学省初等中等教育局視学官の杉田洋氏が、好ましい学級のあり方や、学級づくりの方策を語る。

## 学級づくりの課題

### 学外での集団活動が減少し 育ちにくくなった社会性

長年、教育現場を見つめる中で、子ども同士が人間関係を結ぶことが難しくなってきたりするように感じています。その結果、学級づくりに苦慮する先生も増えているようです。

その背景の1つに、子どもの「巣ごもり化」が挙げられます。近所の学年が違う子どもが集まって遊ぶことは、社会性を育てる重要な場となりますが、今は大勢の子どもが屋外に集まって遊べる機会が減りました。友だちと一緒に遊ぶといっても、部屋の中で別々に

ゲームをして過ごす姿が見られます。

自己中心的な傾向の子どもの増加は、そうした環境変化と無関係ではありません。自分の言いたいことを言うだけで、相手の話は聞かない。そういう子どもたちが集まって、互いに高め合うような集団にはなりにくいものです。

保護者の意識にも変化が見られ、特に我が子しか見ようとしめない傾向が強まっています。昔の保護者には「若い先生を育ててやるう」という寛大な面がありました。今では1年目の教師にもベテラン教師と同じ能力を求め、小さな失敗も見逃しません。そうした状況で、保護者とのかわり方に悩む教師が

増えています。

また、教師自身も、幼少期からTVゲームに親しみ、望ましい集団活動を経験していない世代が増えています。豊かな経験に基づいて集団活動の指導が出来なくなっているのです。

もう1つ、社会全体の風潮として学力の捉え方の変化も、学級づくりと大きな関連があります。目に見える学力を重視する傾向が強まるあまり、学習指導に重点が置かれ、集団の中での人間関係づくりがおろそかになってしまっているのです。学力は本来、人間としての総合力といえます。学級集団を通して育つ「心」も学力の重要な構成要素です。そうした観点でも、学級づくりは重要なのです。



## 学びに向かう土台を築く学級づくり



すぎた・ひろし◎埼玉県浦和市小学校教諭、浦和市教育委員会、さいたま市教育委員会を経て、現職。文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官、国立教育政策研究所研究開発部教育課程研究センター教育課程調査官を兼任。主な著書に『よりよい人間関係を築く特別活動』（図書文化社）『自分を鍛え、集団を創る！特別活動の教育技術』（小学館）など。

学級集団はなぜ大切なのか

### 学級は多様性のある小さな社会 社会性や人間関係形成能力が育つ

次に学級集団が持つ意味を考えてみたいと思います。

社会的には、人間は集団の遍歴を通して形づくられるといわれています。生まれて初めて属する集団は家族であり、大人になれば社会の中で生きていくことが求められます。その間に位置する学校は、子どもが人間形成をする重要な場です。学校では大半の時間を学級で過ごしますから、そこでの集団体験は子どもの育ちに大きく影響します。学級は、育ちや価値観、能力、体力などが

異なる子どもが集まる、小さな社会です。学級での集団活動を通し、社会で必ず必要とされる社会性や人間関係形成能力を身に付けさせる指導が求められます。地域の異年齢集団が崩壊した今、学校や学級の役割はますます大切になっていくといえるでしょう。

### 子どもが支え合い、認め合う 「支持的な風土」のある学級を

それでは、理想の学級はどのような学級なのでしょう。抽象的ですが、全ての子どもが「幸せ」と感じることだと思います。大人も同じですが、人は「愛される」「褒められる」「役に立つ」「必要とされる」ことで幸せを感じるものだと思います。この4つに満ちた学

級にするためには、風土づくりに取り組む必要があります。

学級の風土を説明するために、学級を「水槽」、子どもを「魚」、生活や人間関係などからつくられる風土を「水」に例えてみましょう（P.8図）。魚が生き生きと泳ぎ回るためには、水をきれいに保つ必要があります。そのためには教師と一緒に水槽の中に入って学級づくりに努めると共に、子ども自身がよりよい水をつくるように、自主的に実践的な取り組みをするように導く必要があります。子どもは、その過程で我慢や努力、正義、規律、協力、思いやりなどを学び、体得するでしょう。逆に、水がよどんでいけば、息苦しくなり、気力を失い、いらいらして争いが起きるかもしれません。

学級において目指すべき風土は、一人ひとりが生かされ、支え合い、認め合う「支持的な風土」です。その反対は、互いに監視し合い、批判し合うような「防衛的な風土」です。

教師が子どもに競争ばかりさせると、防衛的な風土が強まります。例えば、読書量のグラフを教室に掲示して競争させると、それが子どもにとって先生から認められる物差しとなり、そこから外れた子どもは自信や意欲を失ってしまいます。ましてグループ対抗になれば、足を引っ張る子どもを邪魔と感じる危険性があります。競争はすぐに結果が出る方法の1つですが、人を育てる段階の学校教育

図 水槽に見立てた学級の様子



出典 / 杉田洋「よりよい人間関係を築く特別活動」(図書文化社、2009)

では注意して用いる必要があるでしょう。時間は掛かりますが、友だちの失敗を温かく受け止め、助言したり注意したりしながら一緒に成長していく集団の方が人間的といえます。

学級力を高める指導の工夫

教師と子ども、子ども同士の間  
しっかりと糸をつむぐ

支持的な風土のある学級では、教師と子どもとの間の縦糸、また子どもと子どもとの間の横糸がしっかりとつながれています。

縦糸をつなぐためには、教師が子ども全員から「自分は大切にされている」と思われるような接し方が理想です。学級全体をひとくりにせず、一人ひとりとどうかかわるのかを大切にしてください。子どもに思いを伝え

るためには、「ありがとう」「頑張れ」という言葉をあえて使わず、感謝や励ましの気持ちが伝わるようにするにはどんな言葉掛けが出来るかを考えてみるとよいと思います。

教師が出来ることは「受容」と「要求」です。受容ばかりで要求をしなければ優しいだけの先生です。教師には個性がありますので得意な方を大切にしつつ、バランスを意識してください。

発達段階を意識することも重要です。学年が上がるにつれて、子どもに任せる部分を増やしましょう。指導の基本は、教えて、褒めて、我慢することです。子どもが考えれば分かることまで教えていると、いつまでも自分で出来るようにはなりません。時間が掛かってても、子ども自身に気付かせたり言わせたりする方が価値があります。何かが出来ることは大きな喜びであり、それが友だちの励みによって出来たのであれば達成感もひと

おです。学年が上がるほど、子どもに任せて我慢する、言い換えれば「待つ」ことの大切さを常に意識してください。

横糸をつなぐのは、縦糸をつなぐよりも難

しいでしょう。教師が直接糸をつなげる指導ではなく、子ども自身に糸をつなぎたいと思わせる指導からです。

有効な方法の1つは、子どもが協力して少し頑張れば到達できるような目標に向かわせることです。目標は、教師が一方的に与えるのではなく、子ども自身が取り組みたくなるように設定することがポイントです。例えば、子どもたちと共に学級目標を考えるようにすることは良い方法です。

目標設定は全てを子どもに任せるのではなく、学校の方針や保護者の願いを伝えたと上で担任としての思いを説明し、「あなたたちはどうしたい?」と聞きます。子どもたちの発言をまとめていき、結果的によくある目標に落ち着いたとしても、子どもの言葉で語らせることが重要なのです。例えば、子ども自身が「いじめをなくそう」と口にする方が、教師が言うよりも大きな抑止力となります。

学級目標の他にも、学校行事をはじめ、子どもが立ち上がりたくなる目標はいろいろ設定できます。その際、「目標」と「目的」を取り違えないことが重要です。「合唱大会で優勝する」のは目標にすぎず、「全員が参加して力を合わせる」ことが目的です。目標だけに目を向けていると、全員が幸せを感じられる集団にはなりません。集団活動は、少し取り違えるとマイナスに作用する両刃の剣であることを意識してください。

## 学びに向かう土台を築く学級づくり

教師としての資質を高めるには

### 子どもの言葉を謙虚に受け止め 常に人間性を磨く努力を

子どもとの人間的な交流が土台となる学級づくりでは、教師の人間的な資質が大いに求められます。子どもから「この先生に褒められたい」と思われるためには、常に自分自身を磨く努力も必要でしょう。厳しいかもしれませんが、何事も子どもを中心に考えることで、自分の至らなさが見え、それを謙虚に受け止める場面も出てくるかもしれません。

良い学級の授業では、子どもがよく語り、周囲はよく聞きます。そして、誰よりも子どもの話を聞いているのが教師です。

私自身、教師時代は、「聞く」「聞く」「聞く」という「3つの門構え」を心掛けていました。私は子どもや保護者に「担任として信頼できますか」という無記名のアンケートをしました。これが「聞く」ことです。批判もあるため勇気が必要ですが、そうしなければ子ども自己流になってしまいます。次に、子どもの考えを十分に聞き、「こうしたが、どうでしょうか」と問いました。こうして子どもと向き合いながら、経験を深め、教師としての成長を目指していったのです。

保護者との関係づくりでも、相手の気持ちを優先して考えることが大切です。教師は困った時だけ保護者へ電話をしがちですが、

子どもの良いことを伝えるほうが、ずっと信頼は深まるでしょう。減点評価ではなく、加点点評価の観点で「よさを見付ける」というかわり方を意識する方が人を成長させます。

管理職の先生が大切にしたいこと

### 壁を与えることに臆病にならず 張り合いのある集団活動を

先生方がより良い学級づくりを行うために、管理職の先生に心掛けていただきたいのは、学級づくりと同じように、一人ひとりの先生が「幸せ」を感じる学校をつくることです。多くの先生は十分に頑張っています。うまく出来て当たり前という姿勢ではなく、頑張りがいのある学校をつくってください。先生方を愛し、褒め、役に立っていること、そして必要とされていると感じさせることが大切です。

チームで取り組む体制づくりも、管理職の先生の役割です。学級経営を学校全体の取り組みとするためには、特別活動、とりわけ学級活動や、道徳などを学級づくりの中核に位置付けて、統一感をもって指導できるようにする必要があります。そして担任だけに任せず、望ましくない指導は指摘し合える体制を整えましょう。

管理職は、周囲に相談できる人があまりいませんから、孤独に強くなる必要があります。しかし、孤立してはいけません。先生方から

ボトムアップで意見を集め、校長先生が総意としてまとめるようにしましょう。

教師の育成を課題に感じている校長先生もいることでしょう。経験が豊富なベテラン教師は、時に自分のやり方に執着することもありますが、「あなたのために」という姿勢で意見することも必要です。そして次のチャンスを与えましょう。ここでも、温かさ(受容)と厳しさ(要求)を持ち合わせてください。

若手教師には多様なやり方を示し、本人が個性に合わせて選べるようにすると良いと思います。自己決定すると、内省が生じ、それが内発的動機につながります。自分でハードルを立て、自力で飛び越える力を付けることで、教師は自ら成長していきます。

今は、教師も保護者も、子どもに負荷が掛かる課題を与えることに少し臆病になっていると感じます。しかし、1人では解決できないような課題を通して、子どもは協力する大切さを学び、「自分で解決した」「自分たちで乗り越えた」という経験や自信は社会を生き抜く力になるでしょう。チームが協同する中では、意見の食い違いや衝突が必ず起こります。しかし、それを避けようとして壁を与えなければ、集団活動がひ弱になり、何も得られなくなりません。過剰なぶつかり合いにならぬよう、教師が十分に見取りながら、張り合いのある集団活動を通し、本物の人間関係を学べる学級を目指してほしいと願います。

# 全員でつくり上げる学級活動で 居心地の良い学校をつくる

## 福岡県 宗像市立玄海東小学校

かつては授業が成立しない学級があるなど「荒れ」が目立った宗像市立玄海東小学校。学級内で話し合って決めたことは全員で実践するという「学級活動」を継続するうちに、子どもは学級の中で自分の役割を見いだし、居場所を見付け、落ち着きを取り戻していった。今では、異学年の交流や地域行事の参加など、縦横につながるを広げている。

### 取り組みのねらい

- 子どもが安心して学習に取り組めるような学級をつくる
- 子ども相互の関係をより良いものにする
- 地域と共に子どもを育てる関係を育む

### 取り組みの内容

- あいさつをはじめ、基本的な習慣や決まりを守る姿勢を身に付ける
- 学級活動を通し、友だちと力を合わせて問題に取り組む経験を積む
- 異学年の子どもや地域と交流し、さまざまな人々とのつながりを実感する

### 取り組みの成果

- 子どもが落ち着きを取り戻し、学習にきちんと取り組めるようになった
- 子ども同士の人間関係が良好になった
- 人のために何かをしたいという意識が芽生え、自発的な行動が出来るようになった
- 生活面の課題が解消したことを受け、学力向上の取り組みをスタートした

### 取り組みのねらい 学校を楽しい場所にするために 一から学校づくりに取り組む

2009年度、脇田哲郎校長が宗像市立玄海東小学校に赴任した当時、校内は「荒れ」が目立つ状態だった。私語や立ち歩きで授業が成立しない学級があったほか、人間関係をうまく築くことが出来ない子どももいて、教室が安心して学べる環境ではなかったと、脇田校長は振り返る。

「本校は、漁業関係者が多い地域と、農業関係者が多い地域の2つのコミュニティで構成されます。子どもは自然の中で育つこと

### S c h o o l D a t a

◎1972(昭和47)年、池野小学校と岬小学校の統合により開校。学区には福岡県有数の水揚げを誇る鐘崎漁港がある。宗像市研究指定校として小中一貫教育の研究にも取り組む。



校長 脇田哲郎先生

児童数 150人 学級数 7学級(うち特別支援学級1)

所在地 〒811-3514 福岡県宗像市田野1382

TEL 0940-62-2500

URL <http://munakata-edu.jp/genhsyo/>

公開研究会 未定

\*プロフィールは2014年3月時点のものです

# 学びに向かう土台を築く学級づくり

もあり、非常に元気で素直です。しかし、指導の際に少しでも気を抜くと、楽な方向に流れてしまう傾向がありました」

当時は地域の人々から学校に苦情が寄せられることも多く、地域との関係は良好とはいえないものだった。更に、宗像市が実施する子どもへの意識調査では、「学校は楽しくない」といった否定的な考えが目立ち、友だちと協力して活動した経験が少ない様子や、自分に自信が持てない様子が浮かび上がった。

「学校が子どもにとって楽しい場所であつてこそ、毎日通いたくなるものです。そのためには、勉強が分かる楽しさだけでなく、子ども同士がより良い関係を築くことが必要だと考えました。『学校は子どもたちのためのもの』という基本に立ち返り、一から学校づくりに取り組みを決意しました」（脇田校長）

## 取り組みの内容

### 朝のあいさつを始めて3年後 ようやく子どもに心が通じた

脇田校長は子どもたちが抱える問題の根本には、友だちや教師など人に対する関心の薄さがあるのではないかと感じた。そこで、毎朝、登校時に全員が通る学校近くの信号機付近に立ち、一人ひとりにあいさつを始めた。

「あいさつは、コミュニケーションの第一歩です。身をもって、その大切さを伝えたい

と考えました」（脇田校長）

初めは脇田校長があいさつをしても素通りしてしまう子どもが多かったが、1年目の終わり頃には、声を掛けるとあいさつを返す子どもが徐々に増えていった。3年目になると、脇田校長があいさつをする前に、ほぼ全員が自分から「おはようございます」と言うようになった。活動が定着した後も、脇田校長は同じ場所に立ち、あいさつを続けている。

「時間は掛かりましたが、子どもたちが私の存在を認め、安心感を抱くようになってくれたのだと思います。私は全校児童の顔と名前を覚えていたので、登校時に元氣のない子どもや表情が暗い子どもに気付いた時には、担任に伝えるようにしていました。朝のあいさつは、子どもを理解し、指導するための入り口でもあるのです」（脇田校長）

最低限の決まりを守らせることも徹底した。「教室は散らかさない」「机の上に学習以外の物を出さない」など学習や生活に関する学校全体のルールを細かく設定して教師が共有し、どの学級でも同じ指導を繰り返した。すぐには定着しなかったが、根気強く指導を繰り返すことで、子どもたちに徐々に規範意識が芽生えていったという。

### 学級会で話し合って決めた活動は 必ず全員で実践する

子どもが安心して学べる環境をつくるため



宗像市立玄海東小学校校長  
**脇田 哲郎** わきた・てつろう

「学校は子どものためにある」という思いを具体化する。教職員が働きやすい職場をつくる」



宗像市立玄海東小学校  
研究主任  
**山崎 邦彦** やまざき・くにひこ

6学年担任。「教師子ども、保護者、地域など、あらゆる『かかわり』を大切にしたい教育活動をしたい」



宗像市立玄海東小学校  
児童・生徒支援加配  
**高瀬 博** たかせ・ひろし

「地域とのネットワークとチームワークを充実させ、子どもが社会を生き抜く力を育てる」

に、09年度の校内研究では学級活動に取り組んだ。研究主任で6学年担任の山崎邦彦先生は、そのねらいを次のように説明する。

「子ども相互の関係を良くするために、学級活動の時間に皆で話し合って決めたことを実行する体験を多く積ませたいと考えました。それにより、1人では難しいことでも、力を合わせれば出来ると実感させて、学級という集団を高めていくことをねらいました」

学級活動では、1時間で議題を考えて話し合い、翌週の1時間で話し合った結果を実践するという流れを1セットとし、それを月2セット行っている（P.12写真）。

テーマは、「自分たちの生活は自分たちでつくる」という基本方針の下、子どもたちが



写真 6年生の学級会の様子。司会や記録係、黒板係は、輪番制で担当する。話し合いを充実させるために、国語などでも、話し方や聞き方の指導に力を入れている

話し合って決める。学年によって違いがあり、低学年では学級全体が仲良くなるようなレクリエーション活動、中学年では仲間意識が高まるような学級の歌づくりや旗づくり、高学年では学校全体を考えた下級生向けのイベントの開催などが多い。

学級活動では、子どもの主体性を尊重しているが、初めはなかなか話し合いが成立しなかった。そこで、事前に学級会の計画書を作り、話し合いを焦点化するようにした(図)。

「教師も学級の一人として一緒に取り組むというスタンスを保ちながら、一方で話し方や聞き方などを指導しました。一生懸命話し合っても、何も決まらなると徒労感だけが残ってしまうので、時間は掛かっても何をす

#### 図 6年生 学級会の計画書

ていあん日(ていあん日...)		計画委員会
5月24日(木) 曜日 第4回 6の1学級会の計画		07/17
今度の学級会は5月27日(火) 曜日 5時間目です。		
★(1年生と学校アイス)も日は6月1日(月) 曜日です。		
★する場所は(1年教室)です。(昼休み)		
議題(話し合うこと)		
学校クイズの問題を決めよう		
司会	副司会	
記録係	ノート	黒板
議案理由(話し合うわけ)		
1年生が入学して1か月以上がたちますしかし、1年生はまだ学校になれているとは言えません。そこで1年生が学校になれている6年生のみんなと学校クイズを作り1年生に出題しよう。問題は15問くらいです。学級会ではこの15問くらいについて1年生にやさしい問題かどうか話し合います。学級会の後、10日間くらい学校クイズの準備期間とします。学校クイズは1年生が解きますが、準備期間は6年生が責任を持って1年生に教えます。準備期間に6年生と1年生が1つ1つ話し合えるようにしたいです。		
時間	会議の計画	気をつけること
15分	1.はじめの言葉(司会)	1.勝手に意見を言わない
25分	2.提案理由の説明(黒板)	2.必ず1回は発表する
15分	3.司会グループのしよう会	3.聞き方が正しいかを守る
	4.話し合い	4.3の形で発表する
23分	柱1学校クイズの問題について	5.時間内に決める
10分	柱2言語画書の石筆記	6.話し方の受けこえを守る
25分	5.決まらなかったの確認(ノート)	
35分	6.ふりかえり	
5分	7.先生の話し	
15分	8.あわりの言葉(副司会)	

6年生の学級会の計画書。司会や記録係などの役割分担、話し合いのテーマ、テーマを決めた理由などと共に、話し合いの進め方、時間配分、気をつけることなども書き込む。この日は、入学したばかりの1年生にクイズを出して学校になじんでもらおうという企画を話し合った  
\*同校の資料をそのまま掲載

るかを必ず決めて、それを必ず実行するよう  
に導いていきました」(山崎先生)

当初は学級活動に消極的な子どもが目立っ  
た。それでも、学級活動に負の感情を与えな  
いように、教師は必ず良い点を見付け、「今  
回はここが良かったよ」などと評価した。ま  
た、学級づくりに意識が向くように、一生懸  
命に取り組んでいる子どもを必ず褒め、そ  
ういう子どもが少しずつ増えるようにした。

**学級のつながりが強まるにつれ  
話し合いや実践も充実していく**

当時は学力が低迷していたため、教科指導  
を優先した方がよいのではないかという声も  
あった。10年度に同校に赴任した当時、6学

年を担任した高瀬博先生は、このように話す。  
「初めは学級活動を通して、子どもがどこ  
まで変わるのだろうかと思いましたが、こ  
回を重ねるにつれ、徐々に学級内につながり  
が生まれていきました」

ある子どもは、成績は良いが自己主張が強  
く、友だちに対して攻撃的な一面を見せるこ  
ともあった。しかし、学級活動で司会などの  
全体をまとめる役割を任された時に力を発揮  
できたことがきっかけとなり、次第に周囲の  
ことを考えて行動するようになったという。  
そのような姿を目にする中で、教師も学級  
活動の大切さを理解していった。

そして、子ども一人ひとりの参加意識が高  
まるにつれ、学級活動での話し合いや実践の

## 学びに向かう土台を築く学級づくり

レベルも高くなっていった。入学時からずっと学級活動を続けてきた、14年度の5年生が企画した「6年生とのお別れ集会」は、キャンドルに火を灯し、その火を在校生が受け継ぐという演出が施された。6年生の思いや伝統を受け継ぐという意味が込められており、参加した全員が感動に包まれたという。

「教師が指導すれば、最初から効率よく準備が出来て、見た目も良い実践になっていたかもしれません。しかし、子どもに学級活動の運営を任せてきたことによって、自分たちで課題を解決する力が付いていったのです。5年生が自らつくり上げたお別れ集会を見て、教師は見守る立場に徹してきて本当に良かったと思いました」（脇田校長）

### 異学年や地域とのつながりが子どもが変わるきっかけに

他にも、「つながり」の大切さを実感させるさまざまな取り組みを入れる。

異学年の子どもとのつながりを持たせる縦割り活動がその1つだ。毎年、担任が子どもの性格などを基に、1グループを12〜13人とした12の縦割り班を構成。顔合わせ会に始まり、遠足、遊び、旗づくり、給食、掃除など、年間を通して活動に取り組む。すると、活動の時だけでなく、日常的に上級生が下級生に対して優しく、面倒を見るようになった。保護者アンケートでも「6年生になって、下の

学年の子どもの面倒をよく見るようになったのがうれしい」という声が挙がっている。

地域と子どもをつなぐ活動にも力を注ぐ。10年度から学校全体で「鐘崎山笠」という地域の祭りに参加するほか、6年生は地域の人々から盆踊りの指導を受け、5年生は民家に宿泊して漁業や農業などを体験し、4年生は高齢者施設を訪問するなどしている。

当初は信頼関係が築けていなかった地域に、脇田校長をはじめ教師が何度も足を運び、地域行事への参加や学校行事への協力を依頼すると、次第に心を開いてくれるようになった。今では「学校が積極的に入ってくれたことで地域が活性化した」と、感謝の言葉が寄せられるほどになった。

異学年の子どもや地域とつながることにより、子どもの内面に「人のために何かをした」という意識が芽生えている。3年前の東日本大震災では、海が近いために、子どもたちは津波の被害を我がことのように感じた。それが被害地域の人々のために何かしたいという気持ちとなり、募金や寄せ書きを送るといった活動が自然発生的に起こったという。

#### 取り組みの成果

### 生活面の課題が解消し 学力向上の取り組みに移行

今では、荒れがあった当時を知る人が驚く

ほど、子どもたちは落ち着いている。

「授業中は皆が集中して学習に取り組んでおり、注意をすることは減多にありません。子ども同士の関係にも大きな問題は見られなくなりました」（山崎先生）

かつて地域の人々が学校を訪れても気にとめなかった子どもたちが、今では来客を見かけると自分から元気にあいさつをする。

生活面の課題が解消したことで、12年度からは本格的に学力向上に向けた取り組みをスタートさせた。全教師が全児童を理解できるように、全員態勢で臨む。3年生以上で国語や算数、理科などの教科担任制の導入、チーム・ティーチングや習熟度別授業の実施、学習が遅れている子どもを対象とした放課後の補充学習にも力を入れている。

「補充学習では個々の学習進度に合わせて、必要に応じて学年をさかのぼって指導します。『分かった』『出来た』という喜びを味わわせて自尊心を育み、授業への参加意欲を生み出すことを大切にしています」（高瀬先生）

現在、校内研究のテーマは、1学期は学級活動、2・3学期は教科学習としており、当面はその体制を継続する方針だ。

「未来の日本を担う子どもたちに求められる力を考えると、小学校では『人間力』と『学力』を共に育てる必要があると考えています。学校全体として、この2つをいかに育てるか、研究を通して追究し続けます」（脇田校長）

# 子どもの課題を学力と意識の両面から 捉え、学年体制で学級づくり

東京都 品川区立小中一貫校 荏原平塚学園

2010年に開校した品川区立小中一貫校 荏原平塚学園は、開校以来、学力向上のベースとして、学習に向かう姿勢や生活態度の育成に努めてきた。子どもの「意識」を高めるために、さまざまな取り組みを取り入れると共に、それを保護者と共有して積極的な協力を求めている点に注目したい。

## 取り組みのねらい

- 学習に向かう姿勢や生活態度の個人差を解消し、全ての子どもが落ち着いて学べるようにする
- 保護者との連携を強化して、学習や生活に対する意識を高める

## 取り組みの内容

- 「総合学力調査」を活用して子どもの実態を客観的に把握し、指導の方針を検討した
- 意図的に複数の教師が子どもにかかわる指導により、学年全体で子どもを育てる
- 三者面談中に子どもに自己評価を語らせ、保護者にも積極的な協力を求める

## 取り組みの成果

- 落ち着いた学校生活を送るようになった
- 学習に対する姿勢が向上し、学力向上にもつながりつつある
- 学校と保護者が同じ目線で子どもを育てる雰囲気生まれた

## 取り組みのねらい 課題の背景にある要因を分析し 新しい学校づくりを推進

品川区立小中一貫校 荏原平塚学園は、小学校1校と中学校1校が統合して、2010年4月に開校した。校区は商店や住宅、町工場などが混在する地域で、古くからある商店街には下町の雰囲気がある。

子どもは元気いっぱい人懐っこいが、以前は落ち着いて学習に向かえない姿が見られたという。小泉和博校長は次のように話す。

「学習姿勢や生活態度に個人差が大きいことが課題でした。先生方の多くは日々の指導

## S c h o o l D a t a

◎2010(平成22)年に品川区立平塚小学校・荏原平塚中学校が統合して開校した施設一体型の小中一貫校。異学年交流、中学校教員による5、6年生での授業など一貫校ならではの教育に力を注ぐ。



校長 小泉和博先生

児童・生徒数 540人 学級数(1~9学年) 19学級

所在地 〒142-0051 東京都品川区平塚3-16-26

TEL 03-3782-7770

URL <http://school.cts.ne.jp/~ebahi-g/>

公開報告会 2015年1月21日(水) 予定

\*プロフィールは2014年3月時点のものです



# 学びに向かう土台を築く学級づくり

で手一杯で、学級の力を高める指導まで行き届かなかったことが一因だったと思います」  
背景には、家庭における教育力の差の拡大や、新設校のため、地域と十分な連携が出来ていなかったこともあると捉えている。

「周囲に子育ての助言をしてくれる人がおらず、子どもにどう接すればよいのか分からない保護者への対応や啓発を、学校が行う必要があると感じました」（小泉校長）

そうした状況を踏まえ、学校としての一体感を育み、家庭や地域との連携を強めることで、子どもが落ち着いて学べる環境をつくることを目指してきた。

## 取り組みの内容

### 「学力」と「意識」の2つの軸で

### 実態を捉えて対策を検討

学校づくりに当たって、子どもの実態を客観的に捉えるために、12年4月、ベネッセコーポレーションの「総合学力調査」を実施。その分析結果を基に、学校や学級における指導の方針を検討した。二宮副校長は次のように語る。

「子どもの課題の特定については、教師の勘のようなものがあり、大筋では大きく外れません。その教師の勘をデータとして客観視することによって、課題はより明確になりますし、教師間で共有しやすくなります。保護

図1 学年別 学力が高い児童・生徒の意識

- 2年生…家族は自分のことを気に掛けてくれる
- 3年生…一人ひとりの命や心を大切にしている
- 4年生…学級目標に力を合わせて取り組んでいる
- 5年生…家で勉強していて分からないときに教えてくれる人がある
- 6年生…分からないことはそのままにせず、分かるまで努力している
- 7年生…ふだんから「ふしぎだな」「なぜだろう」と感じることがある
- 8年生…自分と違う意見も尊重している
- 9年生…テストで間違えた問題はもう一度やり直している

\*同校の資料を基に編集部で作成

者に対しても、データを示しながら説明すると、説得力が増すという良さもありました」  
調査結果は、二宮副校長が学年・学級ごとに分析し、特に気になる課題を抜き出して教師に提示。担任の学年だけでなく、全校の課題として捉えてほしいと考え、課題は1〜9学年のものを全校の教師に示した。  
「全てのデータを共有しましたが、全てについて対策を講じるのは教師の負担が大き過ぎます。そこで、特に優先される課題を絞り、対策を重点的に行いました」（二宮副校長）  
課題を抽出する時、特に着目したのが学力と意識（学級力・家庭学習力・学びの基礎力・社会的実践力）との関係だ（図1）。2つの関係の強さがデータとして表れたため、まず意識を高めて学びの土台を築いた上で、学力の向上につなげる方針を固めた。



品川区立小中一貫校 荏原平塚学園校長  
**小泉和博** こいずみ かずひろ  
「先生方の発想やアイデアが出しやすい環境をつくり、チームとして学校を活性化していく」



品川区立小中一貫校 荏原平塚学園副校長  
**二宮 淳** にのみや・じゅん  
「どのような社会にも通用する力を育てる。何があっても子どもを見捨てない」



品川区立小中一貫校 荏原平塚学園  
**倉次里絵** くらなみ・りえ  
主幹教諭。4学年担任。「なりたたい自分を思い描かせ、夢を実現させる」



品川区立小中一貫校 荏原平塚学園  
**西村柳一郎** にしむら・りゅういちろう  
主任教諭。4学年担任。「教育の最終目標である自己実現をさせるために自尊心を育てる」



品川区立小中一貫校 荏原平塚学園  
**伊藤孝仁** いとう・たかひと  
主任教諭。4学年担任。「一人は皆のために、皆は一人のために」という思いで周囲にかかわる子どもを育てる」

取り組みを考える上では、子どもを「学力」と「意識」の2つの軸で構成した4つのゾーンで把握した（P.16図2）。初めにDゾーンの子どもをCゾーンへと育て、その後、Aゾーンを目指すという方針を立てた。塾に通う子どもなどの中によく見られたBゾーンの子どもも、人間性が十分に育たなければ、将来的

にいずれ挫折してしまうと考え、Aゾーンへと育てる指導の必要性を保護者に伝えた。

品川区立の小・中学校には、自己管理や人間関係形成、自治的活動などの資質や能力を育てる「市民科」という科目がある。意識を高めるために、調査結果で課題があった項目について市民科で重点的に指導した。

また、学校全体で生活規律の整備、あいさつ運動の実施、縦割り活動の充実などに取り組みほか、13年度からはボランティア活動を積極的に取り入れ、「心を耕す」ことを目指す。

### 守らせるルールを5つに絞り 学年全体で指導を徹底させる

学年や学級での具体的な指導は、それぞれの実態に合わせて検討した。13年度の4年生の取り組みを見てみよう。

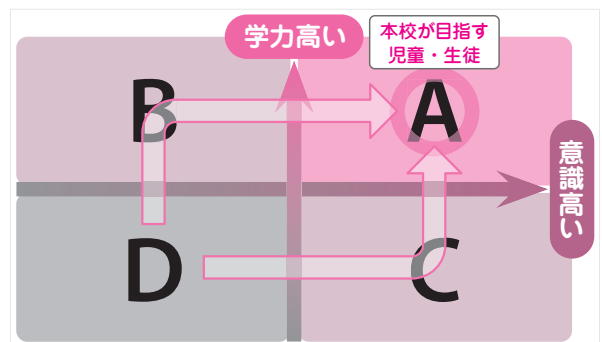
4学年主任の西村柳一郎先生は次のように説明する。

「調査結果では、学習に向かう姿勢や生活態度が十分に育っていないという課題が裏付けられました。学年が一体となり、各学級の力を高め、一人ひとりの子どもを伸ばすことを目指しました」

取り組みの1つが、学校としてのルールの明確化だ。教職員で話し合い、「返事」「時間」「身だしなみ」「あいさつ」「言葉遣い」に関する指導を徹底することを決めた。

「学校生活のルールは非常に多岐にわたり

図2 「学力」と「意識」の関係



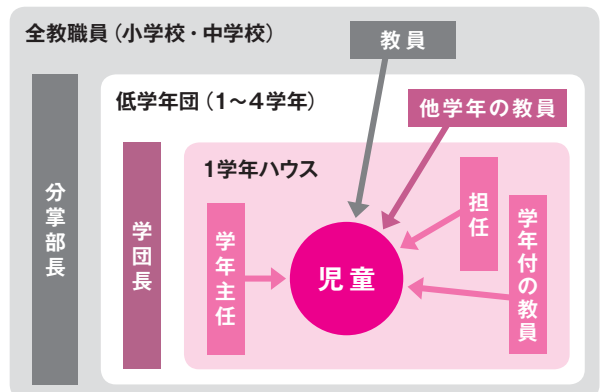
家庭と連携して児童・生徒の意識を高め、学力向上に結び付ける

子どもたちが、学力が高く、意識も高い「Aゾーン」を目指すよう、教育活動を行うことが、学校の目標だ  
\*同校の資料を基に編集部で作成

ます。その全てを守らせるのは現実的ではないと考え、特に重要な5つに絞りました。そして、『これだけは絶対に守ること』と、強い信念で繰り返し伝えました」（西村先生）  
学園では「荏平（えばひら）ハウス方式」として、意図的に複数の教師で子どもにかかわる体制を取っている（図3）。学年全体で各学級を育てると意識の下、3人の担任が3学級を回り、それぞれ1つのテーマで市民科の授業を行う試みもした。4学年担任の伊藤孝仁先生は、次のように子どもの様子を話す。

「別の学級の教師の個性や発問により、子どもは普段とは違う反応や発言をしていました。また、担任の先生だけではなく、学年の先生に見守られているという意識も生まれた

図3 「荏平（えばひら）ハウス方式」



「学年を1つの温かいハウス」として、意図的に複数の教員で児童にかかわり、学級の安定に努める  
\*同校の資料を基に編集部で作成

と思います」

4年生の調査結果では、子どもが学級目標を知っていることと学力との間に相関関係があることが示されたため、倉次里絵先生はこの点に着目し、学級目標の定着を図った。

「一人ひとりが学級の大切なメンバーだという帰属意識を高めるため、皆で話し合っ学級目標を決めました。『1～3年生のあこがれになること』『かっこいい5年生になること』が子どもから挙がり、そこへ私の願いを加えて、『自分や人の命、体、心、時間を大切にする』の3つとしました。それを教室に掲示し、『皆で達成しよう』という雰囲気づくりを努めるうちに定着が進み、自分の目標として意識できるようになりました」

## 学びに向かう土台を築く学級づくり

倉次先生は、家庭の教育力に差がある状況にも目を向け、その差を埋める取り組みとして、辞書を使うことの良さを授業で積極的に伝えた。すると、一部の子どもが自主的に調べて発言するようになり、また、その子どもを取り組みを褒めることで、辞書活用が学級に広がっていった。

学年全体の取り組みとして、「評価」の方法を工夫し、統一したことにも注目したい。

「学年や学級として学習や生活の面で到達させたいことは、『絶対評価』の観点で目標の到達を目指しました。一方、一人ひとりに対しては、『前よりも良くなったね。ここを頑張れば目標に近づくよ』などと『個人内評価』の観点から声を掛けることで、自尊心を高めていきました」（西村先生）

### 子どもの自己評価と課題を 三者面談で自分の言葉で語らせる

意識の向上に向けた数々の取り組みの効果を最大にするためには家庭の協力が不可欠と考え、保護者に連携を求めた。

「学校の指導だけで子どもの力を伸ばすことには限界があります。教師は力を尽くした上で、保護者に協力を求めていく姿勢が必要です」（倉次先生）

4年生では、年度初めの保護者会で、「1年間でこんな子どもに育てる」というメッセージを示し、その後の保護者会では学期

ごとに成果を伝えた。更に、7月の保護者面談では、学校と保護者の目線を合わせるために、保護者の思いを尋ねた。

「保護者に『教育で一番大切にしていることは何か』『それがどのような子どもの姿で見られることを期待するか』を聞き、学校に望んでいることを捉えました」（西村先生）

12月の三者面談では、生活や学習について子ども自身が自己評価をして、教師と保護者の前で発表した。子ども自身の言葉で伝えることで、保護者により実感を持ってもらうのがねらいだ。課題については、保護者と教師の前で「これから頑張ること」として約束した。子どもには、自身の内面を深く見つめさせ、保護者には、子どもの課題をその子の言葉で知らせるといふ点で、非常に難しい取り組みだったという。

「3学期に入ってから、『約束』を改めて紙に書かせるなどの指導をすることで、徐々に自分の課題として意識するようになり、具体的な行動が変化していきました」（倉次先生）

### 取り組みの成果

#### まるで別の学級のように 学習に意欲的に取り組む子どもたち

一連の取り組みは、子どもたちにどのような影響を及ぼしたのだろうか。

「1年間の取り組みで、4年生の姿はまる

で別学級かのように変わりました。課題に対して真剣に取り組むようになりましたし、出来た子どもが周りの子どもにアドバイスをする姿も日常的になりました」（伊藤先生）

以前は私語だった授業中のざわつきが、今では教え合うことによるものへと質が変わったことに、教師は喜んでいいる。

テストに対する姿勢からも、意識の変化が見て取れる。以前は「テストがある」と言っても内容に無関心だったが、今では「えー！」と驚きの声上がる。採点した答案を返すと、熱心に見直す姿が見られるようになった。

「子どもの姿から、『学力につながっている』と自信を持って言えます。次回の総合学力調査の結果が楽しみです」（倉次先生）

今後は家庭との連携により、自学をより強く促していく方針だ。

「学校教育で最も大切なのは授業です。教師は指導力を上げる必要がありますが、同時に授業だけでは限界があることも認識し、家庭で自学に向かわせる方策を考えたいと思います」（西村先生）

14年度も4月に総合学力調査を行い、2学期末には意識調査のみ2回目を実施する。

「学力と意識の双方の変化を正しく捉え、次の目標である学力向上につなげていきます。現時点で意識はかなり高まっていますので、15年度からは学力に重点をシフトする方針です」（小泉校長）

# プロジェクト活動の積み重ねで 子どもと共に学級をつくる

## 山梨県 山梨市立日川小学校

山梨市立日川小学校は、2011年度、学級全員で学級づくりを進める「学級力向上プロジェクト」を始めた。学級の実態を子どもが分かるように「見える化」して、自ら課題や目標を明確にすることによって、学級づくりに主体的に参画する意識を生み出している。

### 取り組みのねらい

- 子どもたちの学級に対する意識の差を小さくする
- 「学級を良くしたい」という気持ちを、具体的に行動に移せるようにする
- 担任に任せがちな学級経営について、学校全体でより良く行うための手法を確立する

### 取り組みの内容

- 「良い学級」にするために必要なことを子どもの言葉で語らせる
- 子どものアンケートを基にレーダーチャートを作成し、学級の実態を「見える化」する
- 子ども同士が褒め合う仕組みをつくる
- レーダーチャートを基に全学年・学級で目標に取り組み、教師間で学級経営の手法を共有する

### 取り組みの成果

- 学級の課題を踏まえ、「こういう点を良くしよう」と意識するようになった
- コミュニケーションが豊かになり、言語活動が充実した
- 教師たちにより良い学級経営をしようとする意識が高まった

取り組みのねらい  
誰でも実践できる学級づくりの  
手法の確立をめざす

山梨市立日川小学校が「学級力向上プロジェクト」に取り組み始めたのは、2011年度に山梨県から「学力向上パイロットスクール」の指定を受けたことがきっかけだった。原喜雄校長は次のように話す。

「学力向上のためには、子どもが安心して学習できる環境を整えること、つまり学級づくりが先決であるという考えの下、学級力向上を図る取り組みを始めました」

家庭や地域の協力もあり、子どもには生活

### S c h o o l D a t a

◎1874(明治7)年開校。甲府盆地の東部に位置し、周囲にはぶどう畑が広がる。地域の伝統行事に積極的に参加するなど、地域社会に根ざした学校づくりに力を入れる。



校長 原喜雄先生

児童数 209人 学級数 9学級(うち特別支援学級2)

所在地 〒405-0024 山梨県山梨市歌田140-1

TEL 0553-22-0742

URL <http://www.city.yamanashi.yamanashi.jp/gover/public/school/hikawa.html>

公開研究会 未定

\*プロフィールは2014年3月時点のものです

# 学びに向かう土台を築く学級づくり

態度や学習姿勢の面では大きな課題は見られなかった。しかし、友だちとのかわりという面で見ると、子どもたちに意識の差があり、率先して頑張る子どもと受け身の子どもに分かれていた。また、子どもが「学級を良くしたい」という気持ちを抱いても、なかなか行動に移しにくいという課題もあった。

校内研究では、担任個々の努力に任せることが多かった学級経営のあり方を見直し、学校全体で共通理解を図りながら、誰でも実践できる手法の確立を目指した。また、学級経営の重要性には賛同しても、それまでの校内研究のテーマは教科学習が中心だったこともあり、「学級力」を高める手法の研究に戸惑う教師もいた。そこで、早稲田大の田中博之教授から助言を受けながら研究を進めた。

## 取り組みの内容

### 教師主導のあり方を見直し 子どもと一緒に学級をつくる

11年度の試行期間を経て、12年度に中学年以上で本格的な実践が始まった。最も重視したことは、教師主導の「プログラム型」から、子どもと共に学級をつくる「プロジェクト型」への移行だ。3年生での実践を通し、子どもが参画する学級づくりの進め方を見ていく。

まず年度の最初に実施するのが、「ビッグカルタ」だ（写真1）。教師が子どもたちに

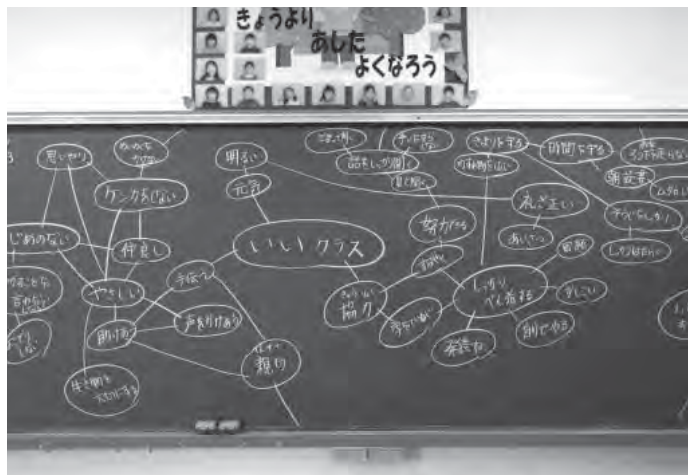


写真1 子どもから出たさまざまな意見を教師が整理したビッグカルタ。写真に撮って教室に掲示し、「いいクラス」のイメージを忘れないようにした

に「今のクラスは良いクラスだろうか」「良いクラスとは、どのようなクラスだろうか」などと問い掛け、子どもたちから各自が考える良い学級のイメージを引き出していく。

12年度、日野原和貴先生が受け持った3年生の学級では、良いクラスの条件として、初めは「しっかりと勉強する」「やさしい」という意見が挙がった。そうした抽象的な意見に対して、日野原先生が「勉強するとは、どういうこと？」と何度も問い掛ける。すると、子どもたちから「きちんと宿題をする」「自分でやる」「字を丁寧に書く」といった具体的な意見が出てきた。日野原先生は、これら



山梨市立日川小学校校長  
**原 喜雄** はら・よしお  
「子どもや教職員から自然な笑顔が湧き出る『たのしい学校、たのしい授業、たのしい職場』をつくる」



山梨市立日川小学校  
研究主任。2学年担任。「子どもの話に耳を傾け、安心して過ごせる学級をつくる」  
**高野 栄子** たかの・えいこ



山梨市立日川小学校  
4学年担任。「子どもを1人の人間として尊重し、つながりを大切に深い信頼関係を築く」  
**日野原和貴** ひのはら・かずき

を整理しながら黒板に書き込み、ビッグカルタを完成させた。

そのように、理想とする学級の状態を認識させた後、5月に学級での学習や生活、人間関係などの状態を、子どもが個々に評価する「学級力アンケート」(\*)を行う。集計結果はリーダーチャート(P.20写真2)で表し、これを基に「スマイルタイム」で学級の課題は何か、どう改善すればよいかを話し合う。

日野原先生の学級では、学級力アンケートの結果、「聞く姿勢」「学習」が低いことが分かった。それらを改善するための方法を学級全員で話し合い、「聞く姿勢」については「人の目を見て聞く」「最後まで聞く」「うなずきながら聞く」など具体的な目標を出した。

\*「学級力アンケート」はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトからダウンロードできます。  
<http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報 (小学校向け)

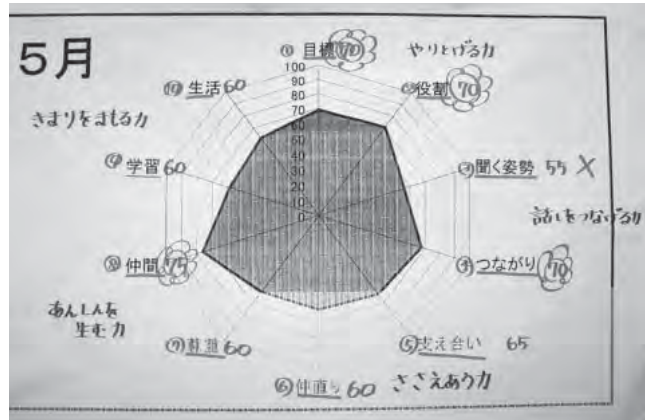


写真2 学級力アンケートの結果を集計したレーダーチャート。日野原先生の学級の話し合いでは、数値が低かった「聞く姿勢」「学習」を重点的に改善する流れになった。教師はレーダーチャートをあらかじめ分析しているが、あくまでも子どもの言葉で語らせることを大切にしている

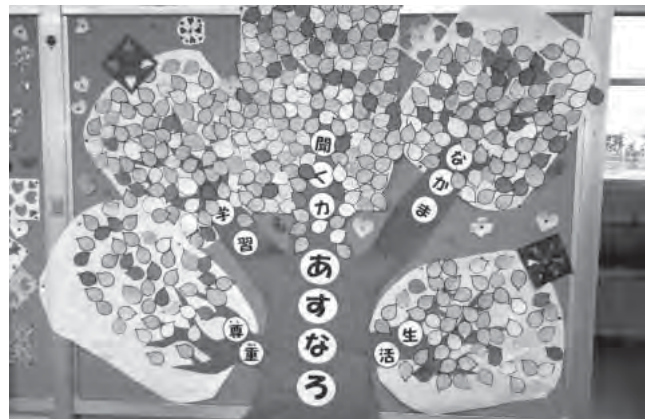


写真3 日野原先生の学級では目標を「あすなる木」にし、良かった友だちの姿を葉のカードに書いて貼った。特定の子どもにカードが偏らないよう、隣同士やグループ内で書く場面も設ける。最初は「聞く力」「学習」だった枝は、「学級力アンケート」の結果を受けて「なかま」「尊重」「生活」が増えた

これらの目標を学級全員で達成するために「あすなる大作戦」を行った。あすなるの木に見立てた掲示物に、友だちの良かった姿を記入した「ほめほめカード」を貼っていく。日野原先生は、この一連の学級づくりにおいて気を付けている点をこう話す。

「課題や目標を教師が一方的に伝えるのではなく、ビッグカルタや学級力アンケート結果の分析などによって、子ども自身が考える」と、『自分たちのこと』という主体的な姿勢が生まれます。更に、友だちを褒め合う場面を加えることで、子どもも教師もめあてに対して意識的になり、良い行動が広がっていきます」

学級力アンケートは、10月と1月にも実施し、努力の成果を「見える化」して目標への意識を促すと共に、新たな課題の発見に努めた。集計結果が出たら、スマイルタイムで分析し、課題が浮かんできたら解決方法を話し合う。日野原先生の学級では、新たに課題に対する目標として、あすなるの木に「枝」を追加した。最初は2本だった枝が、最終的には5本になったという(写真3)。

また、日野原先生は、学級力アンケートの結果を自身の指導に生かしていると話す。

「レーダーチャートはあくまでも子どもが学級について考えるきっかけであり、他学級と比べた数値の高低は重視していません。ま

た、次第に子どもへの学級に対する意識が高まると、評価が厳しくなることもあります。今は、教師自身が指導を振り返るきっかけにもなっています」

例えば、1月のレーダーチャートでは「つながり」の項目に低い結果が出て、日野原先生はつながりを意識した指導にあまり力を入れていなかったことに気付いた。そこで、授業中の発問を工夫すると、徐々につながりのある発言が生まれていったという。

1年間の取り組みを通して、学級づくりに対する意識の高まりを感じた日野原先生は、持ち上がりとなった13年度の4年生の学級では、より効果的に目標を達成するために、学級目標を踏まえた個人目標を設定し、短冊に書いて机に貼る取り組みを始めた。個人目標を達成する姿が見られた時は、友だちが短冊にシールを貼るといった方法で励ましている。

### 年3回の「スマイルミーティング」で教師が互いの実践を認め合う

年度初めのビッグカルタと年3回の学級力アンケートは学校共通の取り組みとして行い、スマイルタイムや目標達成に向けた取り組みは、それぞれの担任が工夫している。研究主任の高野栄子先生はこのように語る。

「学校全体としての方向性の下、取り組みの具体策は決めきらず、学級の実態と先生の個性を生かして取り組みを工夫しています」

## 学びに向かう土台を築く学級づくり



**写真4** スマイルミーティングでは、各学級の報告に対し、良かった点を中心に意見を出し合う。手法の共有と共に、学級経営に対する意欲を維持・向上させることもねらいだ

ビッグカルタと学級力アンケートは3年生以上での実践だったが、1・2年生の担任からも実践したいという強い声があり、13年度は1月に試験的に1・2年生でも学級力アンケートを行った。

担任個々の工夫を共有する場としては、年3回「スマイルミーティング」を開いている。2つのグループに分かれ、各学級の報告について良いと感じた点などを付せんに記入して整理し、全体で共有する（写真4）。

例えば、ある学年で、学級力アンケートでリーダーチャートが大幅に小さくなったことがあった。そのため、道徳の時間などに友だちの良いところを探したり、「いい言葉」「いやな言葉」を出し合ったりする活動をしたと

ころ、リーダーチャートが元のように大きくなったという指導事例が共有された。

試行段階である低学年の担任も報告し、学校全体で有効な指導を検討している。2年生の学級では、目標を意識して活動するのがまだ難しいため、「トゲトゲ言葉撲滅運動」と称して言葉遣いを見直すなど、感覚に訴える活動を中心に据え、一定の成果が見られたことなどが報告された。

### 取り組みの成果

#### 学級力の向上が 言語活動などの深まりをもたらす

学級力向上プロジェクトを通し、子どもの姿はどう変容しているのか。

「子どもたちが漠然と感じていた学級の課題が数値として目に見える状態になり、『こういう点を良くしよう』と意識するようになりました。学級としての目標が明確になったため、子どもによる意識の差も小さくなったと感じています」（高野先生）

子どもへの学習に対する姿勢も明らかに意欲的になっていくと話す。

「以前より、落ち着いた態度で授業に集中するようになりました。少しざわついた時でも、『聞く姿勢はどう？』という一言で、すぐに集中力を取り戻します」（日野原先生）  
子ども同士の関係が良くなり、学習を深め

やすくなったことも大きな成果と感じている。特に、言語活動を充実させやすくなったのが大きいと、原校長は話す。

「豊かなコミュニケーションが成立する学級が基盤になれば、意見交換やグループ学習は深まりせん。学級づくりと教科指導はセットであると、改めて感じています」

学級経営に対する教師の考え方にも変化が見られた。学級経営について共通理解を図り、実践事例を共有する中で、互いが刺激し合い、より良い学級をつくらうという気持ちが強まっている。同校には40、50代の教師が多いが、経験則に基づいた指導になりがちなベテラン教師も、学級経営を見直す大きなきっかけとなった。

学級経営の手法が共通化されて各学級の実態が見えやすくなったため、課題が大きくなる前に管理職が把握し、早めに対応できるようになったことも大きな利点に挙げる。

「少子化などの影響で人間関係が築きにくくなる中、集団内で生きる力を育成する場として、学級の役割はますます大きくなっていくでしょう。研究を続けていると、実行すること自体が目的化してしまいがちです。それを避けるためにも、教師と子ども、また子ども同士の応答が成立しているか、自分たちで考えて問題を乗り越える力が育っているかなど、常に子どもの成長を見つめて取り組みを深めていきたいと思えます」（原校長）

本への思いを自分の言葉で熱く語る

「私がお薦めするのはこの本です」  
草津市立玉川小学校の6年1組の「総合的な学習の時間」の授業で、校内で初めての「ビブリオバトル」が行われた。これは、自分が薦める本を1人3分間（\*1）でプレゼンテーションをし、その場にいる人の多数決で最も読みたい本を決めるとい

滋賀県草津市立玉川小学校

# 表現する力と聞く力を育む ビブリオバトル

人は、読書によって、言葉を学び、論理性を身に付け、創造力を豊かにする。読書は人生をより深くするものとして重要であり、多くの学校で力を入れる活動の1つである。朝読書、読書感想文、音読、読み聞かせなど、さまざまな活動があるが、新しいスタイルの読書活動として、全国に広まりつつあるのが「ビブリオバトル」だ。

## School Data



### 滋賀県草津市立玉川小学校

◎ 1977（昭和52）年開校。「心豊かで自ら気づき考え実践力をつけた玉川の子」を教育の基本姿勢に掲げ、防災教育や知育に力を入れる。漢字検定奨励賞を2010年度から3年連続で受賞。校長 新庄正幸先生／児童数 651人／学級数 25学級（うち特別支援学級3）／所在地 〒525-0059 滋賀県草津市野路9-6-12 TEL 077-563-1271 / URL <http://www.tamagawa-p.skcc.ed.jp>

うゲーム形式の書評合戦だ。今回は3人の子どもが発表者となり、面白かった場面や選んだ理由などをそれぞれ紹介した（写真1）。「本は文字が書いてあるだけなのに、目を閉じるとその風景が浮かんできました」。続きをどんどん読みたくなりました。「結末には皆さん、驚くと思います」など、本を読んで自分が感じた魅力を熱く語る。続いて、2分間の質問タイムだ。子ども

もたちは次々に手を挙げ、担任の折居幸子先生が順番に指名していく。「内容を想像できるようにあらすじを話しているのがよかったです」「ユーモアを交えながら話していたので楽しかったです」という感想以外にも、「読むのにどれくらい掛かりましたか」「本を読んで、自分が変わったと思うことはありますか」などの質問も投げ掛けられた。発表者が「じっくり読んだので1か月掛かりました」「私はこんなところが変わりました」と答えると、子どもたちはうなずき、また次の手が挙がる（写真2）。

最後に、3冊の中から一番読みたくなった本をクラス全員がそれぞれ選び、「チャンプ本」を決めた。授業後、発表者の周りに子どもたちが集まり、紹介された本を手にとって、「図書館にあるかな?」「他にどんな本が面白かった?」など盛り上がる。折居先生は授業を振り返ってこう話す。

「質問タイムが予想以上に盛り上がり、驚きました。発表者は以前にビブリオバトルを経験していたので大丈夫だと思いましたが、質問タイムでは質問が出ないかと不安でした。子どもたちは発表をしっかりと聞き、感じたことを伝え、互いの考えを深められていました」

### 本を介した新しいコミュニケーション

ビブリオバトルは、立命館大の谷口忠大

\*1 ビブリオバトルの公式ルールでは発表は1人5分だが、小・中学生の場合、「ミニ・ビブリオバトル」という名称で、3分で行うことがある





草津市立玉川小学校校長

新庄正幸

しんじょう・まさゆき 「子どもの心が動く教育活動を積み重ねていきたい」



草津市立玉川小学校

折居幸子

おりい・さちこ 6学年担任。「話し合い活動を大事にして、一人ひとりが自分らしくいられる学級づくりを心掛けている」



草津市教育委員会

清水康行

しみず・やすゆき 教育部副部長。「市と学校の緊密で良好なつながりを築いていきたい」



草津市教育委員会

中村真理子

なかむら・まりこ 学校教育課専門員。「学校と連携し、市全体の教育力向上に注力したい」

\*プロフィールは2014年3月時点のものです



写真1 3分間で本の魅力を紹介。どの子どもも手元に原稿を用意せずに話す。聞き手も、発表者を見て、真剣に耳を傾ける。教壇の横にはタイマーがセットされ、3分経ったら途中で終わりとするのがルールだ



写真2 2分間の質問タイムでは、子どもたちから多くの手が上がった。自分のスピーチに対して、すぐにリアクションが返ってくる。発表者と聞き手の双方のコミュニケーション力を育む場になっている

准教授によって2007年に考案された。10年頃から全国的に広まり、今では学校、図書館、自治体、企業など、さまざまな団体が開催している。

公式ルール（P.24図）を持つビブリオバトルだが、その特徴は最後に「チャンプ本」を決めることにある。発表者は、勝つために本の魅力を伝えるプレゼンテーション力はもちろんのこと、みんなが読みたくなる本を選ぶという社会的視点も求められる。聞き手は、1票を投じる責任から積極的に耳を傾け、聞く力や思いを受け取る力が養われる。そして、質問タイムによって、発表者も聞き手もいろいろな人の視点が分り、多様な価値観に気付く。このように、

「孤読」になりがちな読書が、コミュニケーションを生む活動となる。授業を参観した新庄正幸校長は、教室全体が活気に満ちていたと話す。

「発表者の3人は、事前に原稿を用意して練習していましたが、本番ではそれを読み上げるのではなく、その場で感じた自分の言葉で話していました。聞き手も、その生き生きとした様子に引き込まれてしつかり聞いていましたし、だからこそ、鋭い質問も出てきたのだと思います」

新庄校長は、子どもにも児童集会などで準備した原稿を読み上げるのではなく、原稿なしスピーチをすることを呼び掛ける。校長自身も、式典や集会では原稿を持たずに

子どもの反応を見ながら式辞や講話を述べており、自らの姿で手本を示しながら、子どもたちの意識を変えようとしている。

折居先生は、クラスを受け持った4月から、学級づくりの土台として話し合い活動に力を入れてきた。その成果がビブリオバトルにも表れていたと言う。

「自分の思いを伝え、友だちの思いを受け止めることを大事にしてきました。質問タイムが活発だったのは、何度も話し合い活動を体験し、安心して自分の思いを伝えられるようになっていたからだと思います」

市でイベントを開き、周知を図る

玉川小学校がビブリオバトルを始めたのは、草津市の「学校図書館活用推進事業」の一環として推奨されたことがきっかけだ。この事業では、各小・中学校に学校司書や運営サポーター、学校図書館ボランティアを配置。日常的に子どもに図書支援が行えるようにして、子どもの主体的な学習活動を支援する場や、情報活用能力を高める場としての学校図書館の価値を高め、豊かな心の育成と学力向上を図っている。

事業のキャッチフレーズが「オール草津で子どもを育てる」ともつと本を読む子どもを育てる。家庭で、学校で、図書館で、あるように、保護者や地域と連携していることも特徴だ。ビブリオバトルも、考案者



写真3 「くさつビブリオバトル 2013」に、玉川小学校からは6年生3人が3つのグループに分かれて参加。1人はチャンプ本に選ばれた

### 図 ビブリオバトル公式ルール

- ① 発表参加者が読んで面白いと思った本を持って集まる
- ② 順番に1人5分間で本を紹介する
- ③ それぞれの発表の後に参加者全員でその発表に開するディスカッションを2～3分行う
- ④ 全ての発表が終了した後に「どの本が一番読みたくなかったか?」を基準とした投票を参加者全員1票で行い、最多票を集めたものを「チャンプ本」とする

出典 / 知的書評合戦ビブリオバトル公式ウェブサイト (\*2)

が在籍する立命館大が市内南部にあり、市と大学とが連携協定を結んだことから、積極的に推し進められるようになった。

市教委は、まずビブリオバトルを市民に周知しようと、13年11月、市の行事の1つ「みなくさまつり」において、「くさつビブリオバトル2013 みなくさの陣」を開催した。発表者は、小学生、中学生、一般・高校生、大学生の部に計50人。参観は自由であり、会場にはさまざまな年代の人々が集まった。イベントを企画・運営した草津市教育委員会の中村真理子専門員は、会場の様子を次のように振り返る。

「質問タイムでは会場からさまざまな質問が飛び出し、本を介して地域の人々の世

代を超えた交流が見られました。また、小学生や中学生が大学生のレベルの高い発表に驚いたり、逆に中学生が小学生のしつかりした発表に感心したりと、異年齢同士で刺激を与え合う場にもなっていました」

### 子どもの心に火がついた

小学生の部の発表者は16人。3グループで行われ、玉川小学校からは冒頭に紹介した3人が参加した(写真3)。

「本校の学校司書がイベントの説明をして参加者を募った際に、立候補したのがこの3人でした。3人とも本が好きで積極的な姿勢をうれしく思いました」(折居先生) 学校司書が見本として発表したところ、本の舞台に行きたくなるような内容で、しかも、原稿や時計を見ずに3分さつちりで終えたことに3人は感動していたという。

「単に感想を話せばよいと考えていた3人は、その発表に衝撃を受けたのでしよう。『チーム玉川』と名乗り、連日、司書の方にアドバイスを受けながら、聞き手の心に訴え掛けるにはどうすればよいかと、話す内容を考え、発表の練習を重ねていました。原稿を持たずに発表することにも、ためらわずに挑戦していました」(新庄校長)

このイベントを契機に市内の小・中学校にビブリオバトルが広まり、玉川小学校以外でも授業などで行われるようになった。

草津市教育委員会教育部の清水康行副部長は、その成果をじわりと感じている。

「最近、小・中学校を訪れると、自分たちの思いを生の声で伝え合う場面が増えていると感じます。ある中学校では、創立記念行事の1つが生徒自身の手で企画・運営されていました。これは、今後、社会に生きる上で大切な力になります。ビブリオバトルは、そうした社会参画力にもつながる活動と捉え、イベントの実施などで学校を支援していきたいと考えています」

読解力、思考力、プレゼンテーション力を伸ばし、互いを尊重し、認め合う態度を育む道徳教育の場にもなるビブリオバトル。13年5月に文部科学省が発表した「第三次子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」の中で、ビブリオバトルは「読むことにとどまらず、言葉の力や表現力を競う新しい取組」とされ、「普及することが望まれる」と明言されている。玉川小学校でも今後、全校に広めていく考えだ。新庄校長は改めてこう話す。

「授業後、自分もやってみようという子どもが大勢いました。思いを伝え、受け止められる。そうした喜びを感じられる活動だと、3人を見て思ったのでしよう。そうした子どもたちの心に火がつく学びを今後もどんどん取り入れ、子どもの主体性を引き出していききたいと思います」

\*2 詳しくは右記ウェブサイト (<http://www.bibliobattle.jp>) を参照ください

# 豊かな心の育成と学力の向上を目指し 読書活動を推進

## 「オール草津」で読書活動を支援

草津市は、基本理念に「子どもが輝く教育のまち・出会いと学びのまち・くさつ」を掲げ、「子どもの生きる力を育む」「学校の教育力を高める」「地域に豊かな学びを創る」という施策方針の下、教育事業を展開している。軸となるのは「学校改革推進事業」だ。市として共通の重点的な取り組みがある一方、各校が教育改革のモデルとなるプランにチャレンジする。三木逸郎教育長は次のように話す。

「個々の学校の教育力を高めるためにも、それぞれが自校の特色や地域性に即した活動を行い、互いの良さを学び合える環境を整えるようにしています」

共通の施策には、漢字検定や英語検定の受検費用を半額補助し、市の全児童・生徒が受検する「各種検定事業」、市内全小・中学校の全普通教室に電子黒板、プロジェ



草津市教育委員会教育長  
三木逸郎 みぎ・いつろう

立命館大BK C事務局副局長、滋賀医科大学長補佐、滋賀県立大学理事長補佐等を経て、08年10月から14年3月まで教育長職を務める。

## 滋賀県草津市

人口約12万7500人。小学校13校、中学校6校。県内第2の人口を有するベッドタウン。20年前に立命館大BK C（ひわこ・くさつキャンパス）が設置され、大学を生かした街づくりが進められている。

\*プロフィールは2014年3月時点のものです

クター、書画カメラを設置する「ICT授業の推進」、各界の第一人者を招いた「スペシャル授業in草津」などを行う「学力向上重点事業」などが挙げられる。学校はこれらの教育施策を行いながら、自校の重点活動を決め、特色化を図る。例えば、玉川小学校では、漢字検定の受検を推進して高い合格率を上げたり、独自に年数回のスペシャル授業を行ったりしている。

ビブリオバトルが推進されている「学校図書館活用推進事業」は、「学力向上重点事業」の1つに位置付けられる。事業では学校司書教諭の専任化を目標としている。

「子どもの活字離れが指摘されて久しいですが、市では図書館の機能を充実させることで、子どもの読書活動を支援しています。人的支援以外にも、書籍のバーコード管理を導入し、貸出をやすくしました。読書は、心を豊かにし、学力向上に結び付く重点施策と捉えています」（中村専門員）  
更に、絵本の読み聞かせと演奏を行う「ブックトークコンサート」、乳児に絵本をプレゼントする「ブックスタート」など、「オール草津」として市全体で読書活動を推進している。

## 市民の理解を得るための広報が必要

このように、教育委員会では人的、設備的に学校支援の充実を図っている。橋川涉

市長は重点施策の1つに教育・福祉を掲げており、教育関係の予算は三木教育長就任以降、1.5倍に増額した。

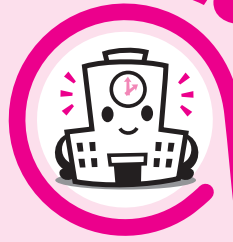
また、財源となる税金を納める市民や、学校とかわりを持つ保護者に対して、「学校で行われる活動への理解を得る仕組みが必要」との考えから、各校には学校活動の積極的な発信を推奨している。

「良い活動であっても、学校外の人たちがその意義を理解していなければ、結局は学校が何をしているのか分からずに、協力しにくかったり、何かのトラブルの際には不信任が募ったりします。管理職の先生には、『自分の学校について自慢し、多くの人に知ってもらうことも職務です』と伝えていきます」（三木教育長）

新聞社を招いて管理職研修を行い、広報マインドを浸透させた。更に、学校と市教委が連携して情報提供に力を入れてきた結果、草津市の学校が新聞などに取り上げられる回数が増えたという。こうして学校外からも新しい発想が寄せられるようになり、学校活動は充実度を増している。

「ビブリオバトルを見学した教育関係者は、自分の思いを堂々と話す子どもたちの姿に感激していました。市はこれからも子どもの学ぶ意欲を伸ばすための活動を、職員全員で知恵を出し合い、学校と連携しながら実施したいと思います」（清水副部長）

# つながる



## 学校と家庭の学び

# 「じぶんコントロールカード」で 目標達成のスキルを身に付ける

### 埼玉県三郷市立前間小学校

三郷市立前間小学校が行う「じぶんコントロールカード」は、子どもが目標を決め、その達成を積み重ねる取り組みだ。「自分へのごほうび」や、毎日自分に声を掛ける「ひとこと」欄を設け、目標達成に必要なセルフコントロールスキルを身に付けさせようとしている。このカードに保護者がコメントを書くことで、更に、子どもの意欲を高めている。

### 自分で自信を持ち 中学校でも活躍してほしい

三郷市立前間小学校では年々児童数が減り、今では全校児童約150人、市内で最も児童数が少ない小学校だ。クラス替えをせずに6年間を過ごし、異学年交流や全校児童で行う活動を重視していることもあり、子どもたちの仲は良い。また、保護者も毎年ほぼ同じ顔ぶれとなるため、PTAなどを通じて横のつながりが強くなり、学校活動にも協力的だ。一方、卒業後は市内で最も規模が

大きく、4つの小学校から生徒が入学する中学校に進学する。環境が大きく変わり、学級に前間小学校出身者が2、3人という状況になることから、子どもが萎縮し、自分らしさを発揮できなくなるのではないかと心配する声が、保護者や教師からあった。河田嘉春校長は次のように話す。「子どもは勉強にも行事にも頑張っ

て取り組んでいます。市の大会など、校外の活動では気後れし、力を発揮できないこともありました。また、将来の夢について答えられない子どもが目立つことも気になりました」

### 自分で目標を決め スマールステップを積み上げる

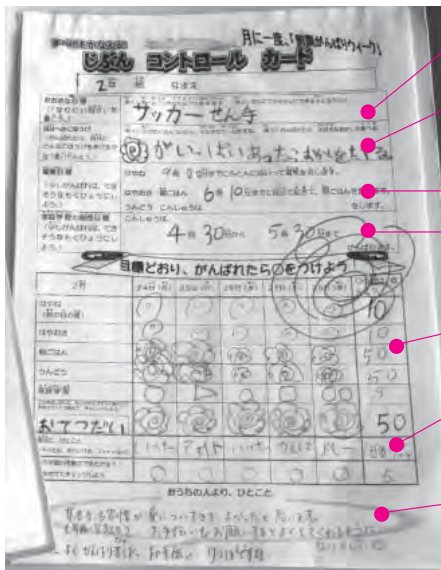
目標や夢を持ち、それに向けて努力することは将来大切な力となり、その積み重ねによって自己肯定感を高めてほしいという思いから、2012年度に始めたのが「じぶんコントロールカード」だ(図1)。子どもが自分で「大きな目標」を立て、頑張った時の「自分へのごほうび」を書き、就寝・起床時刻や家庭学習時間などの目標を決め、毎月1週間、毎日チェックする。そして、保護者が子ども

の記入を見て励ましのコメントを書き、翌週月曜に担任に提出する。

項目は、前教務主任が大学院派遣研修で学んだことを生かして設定された。「大きな目標」は将来につながる目標であり、毎回書くことで意識化が図れる。就寝・起床時刻や家庭学習時間などの目標は、毎日スマールステップを積み重ねることにつながる。更に、「自分へのごほうび」や「自分にひとこと」などの欄を通して、目標達成のための3つのスキルを身に付けることをねらっている。

◎目標設定スキル 簡単すぎず、あ

図1 「じぶんコントロールカード」子どもの記入例、および保護者への説明



- **大きな目標** 将来の夢、近い目標、人として……書けることでよいです
- **自分へのごほうび** がんばった自分に自分自身でごほうびをあげることが、意欲の持続につながります
- **健康目標、家庭学習の時間目標** いきなり、無理をさせないほうがよいでしょう。少しずつ改善していく方向にしていくと○が多くなり、自信や意欲につながります
- **目標どおり、がんばれたら○をつけよう** 自分の行動を振り返り、○×をつけます
- **自分にひとこと** 自分に励ましの言葉を掛けることで、目標達成への追い風となります(自己教示スキル)
- **おうちの人よりひとこと** お子さんの行動に対して褒めてあげてください。行動が強化され、更なる意欲につながります

「じぶんコントロールカード」は1～6年生まで同じ用紙を用いる \*同校の資料を基に編集部で作成

### 埼玉県三郷市立前間小学校

○1984(昭和59)年開校。埼玉県の南東部に位置する。1～5学年が単級(6学年は2学級)の小規模校であることを生かし、「学校・家庭・地域による『共育』をめざして」を目標に掲げて、家庭や地域との連携に力を入れる。2012年度から2年間、三郷市の「算数・数学課題解決研究」を委嘱され、研究に取り組んだ。

校長 河田嘉春先生  
 児童数 147人  
 学級数 7学級  
 所在地 〒341-0015 埼玉県三郷市前間197-1  
 TEL 048-958-1211  
 URL <http://www.edu.city.misato.lg.jp/dd.aspx?menuid=2026>



三郷市立前間小学校校長

**河田嘉春**

かわだ・よしはる

「子どもの良いところをどんどん褒めて認め、伸ばしていきたい」



三郷市立前間小学校教頭

**山口清孝**

やまぐち・きよたか

「子どもの全力を引き出すために、まず教師が何事にも全力で取り組む」



三郷市立前間小学校

**佐伯貴夫**

さえき・たかお

教務主任。「全校児童が1学級という気持ちで、みんなが笑顔になる学校をつくる」



三郷市立前間小学校

**松本拓也**

まつもと・たくや

6学年担任。「誰に対しても何事にも誠実に対応できる教師でありたい」

\*プロフィールは2014年3月時点のものです

る程度チャレンジが必要な、具体的な目標を立てられるようにする。

◎ **自己強化スキル** 頑張っている自分に「ごほうび」をあげ、意欲が持続できるようにする。

◎ **自己教示スキル** 良い時でも悪い時でも、自分で自分の気持ちを前向きに高められるようにする。

山口清孝教頭はこう説明する。「ごほうび欄は自分の頑張りを自分で認める自己肯定感に、自分にひとこと欄は自己教示につながります。当初はごほうび欄に『ケーキが食べた』などと書く子どもが目立ちました。『これが出来たら兄弟で遊ぶ』など気持ちの面での内容を書く子どもも増えてきました」

年間10枚になるカードは1つのファイルにまとめて成果を残す。また、毎月の取り組み後、各学年1人、頑張った子どもや工夫がある子どものカードを、廊下にコーナーを設けて貼っている。

保護者には資料を配布し、保護者会で取り組みの意図を説明した。毎回、子どもの記入をきちんと見てコメントを書く保護者が多い。6学年担任の松本拓也先生は、次のように話す。「保護者には『子どもが決めた目標を達成できるまで見届けましょう』と伝えていきます。努力が認められれば、子どもはうれしくなり、次も頑張ろうと思うでしょう。教師も子どもの良さを見付け、出来ないことがあっても次の課題として、子どもが肯定的に取り組めるように声を掛けています」

教務主任の佐伯貴夫先生も話す。「認められる喜びや目標を達成する喜びを知った子どもたちは、以前の目標を踏まえて自分なりに目標を上げていくようになりました」

「家読ゆうびん」で活性化する本を介した家庭での対話

このように、同校では子どもと保護者がやりとりをする取り組みを重視する。保護者の支援によって進める活動には、読書活動もある。三郷市は「読書のまち三郷」として読書活動に力を入れおり、同校も読解力や表現力の育成につながる取り組みとして読書習慣の定着を図っている。毎週月曜の朝の活動では、保護者ボランティアが読み聞かせをする「ふれあい読書」を行う。また、毎月第4土曜・日曜を「ノーテレビデー」とし、家庭で本を読む日にするよう呼び掛けている。

夏休みには自由課題として「家読

図2 子どもと保護者が本を紹介し合う「家読ゆうびん」



「家読ゆうびん」の形式は自由。左の写真では、B4版の用紙の左半分が子どもが書いた感想、右半分が保護者が書いた感想。三郷市では「家読ゆうびんクール」を毎年開催している。

ゆうびん」を提案したところ、13年度には約45組の親子が参加した。これは、子どもが読んで面白かった本を保護者に薦める絵手紙を書き、保護者はその本を読んだ感想や、自分が子どもの頃に読んだ本を子どもに薦める内容の絵手紙を送るといふ、家庭内の往復書簡だ(図2)。

「全校児童の3割が取り組み、保護者の読書への関心の高さを感じました。保護者からは『子どもと本を紹介して会話が aumentata』なども聞いて

います。本校の図書室の貸し出し冊数も1人当たり年間40冊以上に上り、確実に読書習慣は定着しています」(山口教頭)

13年度には、松本先生が保健の研究授業を行った際、保護者が子どもの学びに深くかかわる工夫をした。「未来につながる姿」と題し、たばこや飲酒、薬物などについて学びながら、将来の夢や目標を達成するためには、何よりも健康が大事であることを伝える、全5時間の授業だ。

松本先生は、毎時間の学習内容をまとめる「保健学習手帳」に「おうちの方から」の欄を設けた。子どもが授業で学んだことを書く「本日の健康レポート」を見ながら、家庭で話し合い、感想を保護者に書いてもらう。更に、「保健学習通信」を毎時間発行し、授業内容を伝えると共に、「保健学習手帳」の保護者のコメントを載せ、保護者の横のつながりが生まれるようにもした。

「子どもと保護者が、学習内容について同じ知識を持って話せるようになりました。保護者の授業に対する理解が深まっただけでなく、保護者とやりとりすることで子どもの興味が広がり、授業の厚みが増したように

感じています」(松本先生)

### 保護者と学校が双方向にやりとりできる場をつくりたい

保護者が子どもの学びにさまざまな場面がかかわるようになり、家庭学習への関心も高まっている。アンケート結果では「子どもが宿題や家庭学習に取り組んでいる」と考える保護者が約92%に上った。保護者の学校への協力姿勢も更に強まっている。

「保護者が学校に協力したいと思っても、どうすればよいか分からないと思います。学校が場を設けて働き掛け、保護者がかかりやすい形にすることが重要です」(佐伯先生)

子どもの姿にも変化が見られる。「中学校からは、本校の卒業生が生徒会や部活動、合唱大会の伴奏など、さまざまな場で活躍していると聞きました。自分の可能性を信じ、身に付けた目標達成のスキルを使い、新しいことに挑戦しようという意欲が育まれていると感じます。保護者参加型の授業を広げるなど、これからも保護者と学校の双方のやりとりが出来る場をつくり、学校への理解を深め、共に子どもを育てる体制を築きたいと思います」(河田校長)

## 夏休み前の学級活動でお使いいただける副教材を無料でご提供します

ベネッセは2007年度から「家庭学習に関する冊子」などを先生方やご家庭に無料で提供する「学び応援プロジェクト」を実施しております。2013年度は、のべ約11,000校で、約218万冊ものご活用をいただきました。2014年度は、高学年の児童向けに、夏休みの上手な過ごし方を指導いただく際に役立つ副教材を無料でご提供いたします。夏休み前のご指導に最適な教材です。ぜひ貴校の教育活動にお役立てください。ただ今、申し込み受付中です。詳しくはホームページまたは本誌同送のチラシをご覧ください。

学校&家庭 学び応援プロジェクトホームページ <http://www.benesse.co.jp/manabiouen/>

未来に進むちからを育むプロジェクト。  
ベネッセの学び応援

申し込み締め切り

2014年

7/11 金

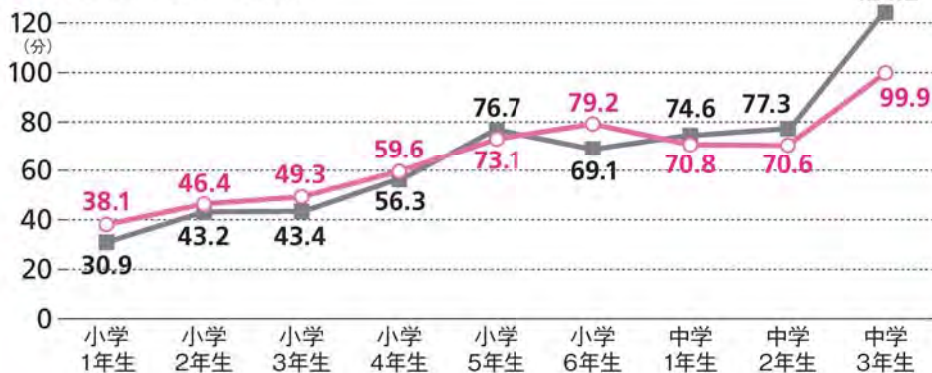


## 子どもの勉強時間は、保護者のかかわり方で大きく変化する 小学校段階では有効な保護者からの働き掛け

学年別／学習へのかかわり別 子どもの平均勉強時間(回答:首都圏の小学1年生～中学3年生の子どもをもつ母親)

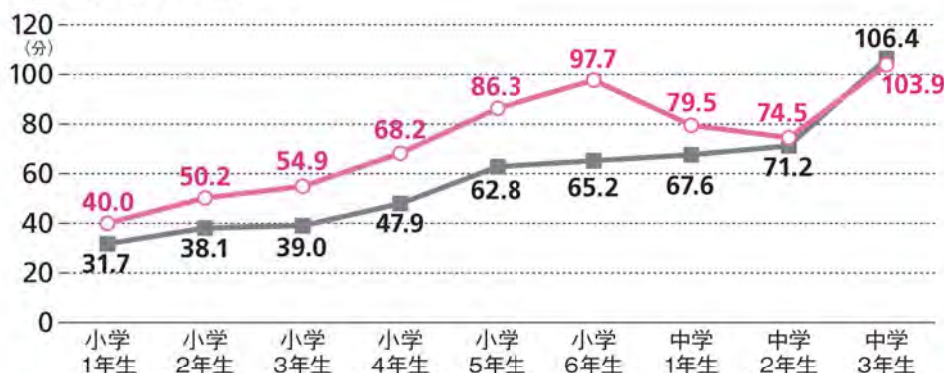
○ よくある+時々ある    ■ あまりない+ぜんぜんない

### ◎「勉強しなさい」と声を掛ける



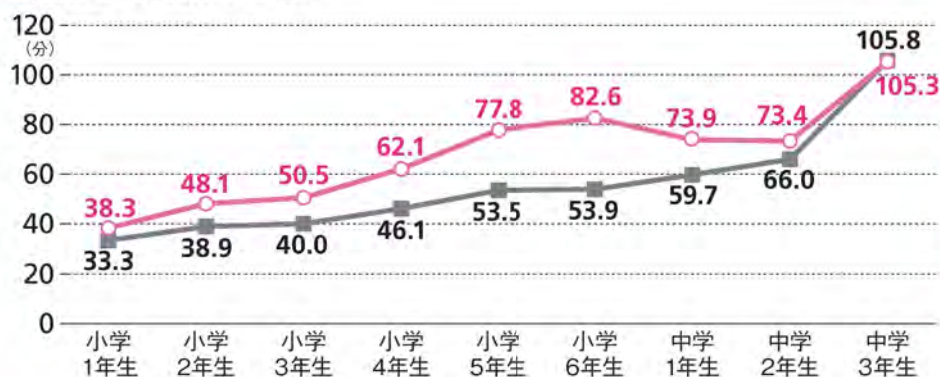
母親が「勉強しなさい」と声を掛けると、小学校段階では小学5年生を除いて、勉強時間がやや長い。ところが、中学校段階になると、保護者が学習を促してもあまり効果が見られなくなり、中学3年生では声を掛けない方が20分以上長い

### ◎勉強の計画を一緒に立てる



母親が勉強計画を一緒に立てると、そうでない場合よりも、小学6年生で勉強時間が30分以上も長い。ただし、中学生になると、自分で計画を立てて勉強することが大切になるため、次第にその差は縮まり、中学3年生ではわずかに逆転する。小学校段階では、保護者が一緒に計画を立てることが学習には有効そうである

### ◎勉強の意義や大切さを伝える



保護者が勉強の意義や大切さを伝えると、高校受験のある中学3年生以外、全ての学年で勉強時間が長い傾向がある。子どもの学習に直接かわる行動ではないが、子どもが納得して学習に取り組むためには、大切なかわりだと考えられる

注1) 勉強時間は1日の学校以外での平均勉強時間で、学習塾や予備校、家庭教師について勉強する時間を含む

注2) 子どもの勉強時間の平均は、「ほとんどしない」を0分、「およそ30分」を30分、「3時間30分」を210分、「それ以上」を240分のように置き換えて、無回答・不明を除いて算出

出典:ベネッセ教育総合研究所「第4回子育て生活基本調査(小中版)」(2012)

調査時期は、2011年9月、調査対象は、首都圏の小学1年生～中学3年生の子どもをもつ保護者8,079人(うち分析対象は母親7,519人)、調査方法は学校通しによる家庭での自記式質問紙調査



上記の関連データはコチラ!  
<http://berd.benesse.jp/>  
\*「調査・教育データ」コーナーをご覧ください

小中高 教師が共に語り、オピニオンをつくる

# Teachers' cafe

## 第2回ワークショップ 開催

全国から小学校、中学校、高校の先生方が一堂に会し、子どもの成長や教育について語り合う Teachers' cafe の第2回ワークショップを、2014年2月に開きました。その模様をお伝えします。

### ◎全国から小中高27名の先生が参加

全国から19名の先生に参加いただいた第1回のワークショップの様子は、本誌2013年度vol.4でお伝えしました。第2回は参加人数を拡大。第1回に参加した先生に加え、20代～60代の幅広い年代の小中高の先生27人が全国から集まりました。

今回、議論をより深めるために自己紹介の後に行ったのが、第1回の内容の共有です。オピニオンの模造紙を掲示し、前回参加者によるポスターセッションを実施しました。更に、ベネッセ教育総合研究所の研究者が、子どもの学習意識調査の結果や、今後100年の世界・日本の動向を踏まえた社会環境の変化予測を報告。子どもが将来どんな社会を生きていくのか、その時に求められる力は何かを思い描くための情報提供をしました。

### ◎「テストがなかったら」の前提で、教育の根本に迫る

議論の進め方は、今回もワールドカフェ形式を採用。まず、小中高の先生方が混合のグループをつくり、「テストや受験がなかったら、子どもに何を身に付けさせたいか」をテーマに語り合いました。グループを3回替えながら、地域も学校種も年齢も役職も違う人たちの思いを聞き、視野を広げていきました。「テストや受験がない」という前提には「そんなことを考えたこともなかった」という意見も聞かれましたが、「評価がなければ何を教えたいか」「社

会で生きるにはどんな力が必要なのか」という教育の根本へと議論が深まっていきました。

メインは、「オピニオンづくり」です。課題意識が近い先生同士でチームをつくり、「12年間で身に付けさせたい力を小中高でどのように教えるか？」をテーマに、議論をまとめました。オピニオンは、チームで用いる言葉は違っていました。しかし、「社会を生き抜くためにどんな力を付けたらいいか」「そのために教師がすべきことは何か」という課題は共通しており、先生方の根底に流れる熱い思いは学校種を超えて同じであることを確認できました。

また、後日、ワークショップを振り返るきっかけとして、チームの代表の先生にオピニオンの内容を整理したレポートの提出を依頼しました。

### ◎今後も全国の先生方をつなぐ場として

日々のご指導で忙しい先生方にとって、学校種や立場を超えて、教育について熱く語る機会は限られるようです。参加した先生方からは「貴重な経験が出来た」「新しい知見を得た」といった声を多くいただきました。また、第2回ではベネッセ社員も議論に参加することで、学校現場に理解を深めることが出来ました。

今後も Teachers' cafe のような機会を持ち、学校種や地域を超えて先生方をつなぐとともに、先生方と共に学校教育について考えていきたいと思います。

### ワークショップの流れ

- 13:00 **オリエンテーション、自己紹介**
- 13:40 **前回の内容を共有**  
第1回参加者によるポスターセッションを行い、内容を振り返り、共有した。
- 13:50 **視野を広げる**  
ベネッセ教育総合研究所から、教育を取り巻く社会環境予測について情報を提供。
- 14:00 **問題意識を共有する**  
4人1組となり、ワールドカフェ形式で「テストや受験がなかったら、子どもに何を身に付けさせたいか」をテーマに語り合う。1ラウンド15分で、グループを替えながら3ラウンド。
- 15:10 **オピニオンをつくる**  
「12年間で何をどのように教えるか？」として、課題意識が近い者同士がチームをつくり、オピニオンをまとめる。
- 17:00 **発表**  
9チームがそれぞれのオピニオンを発表
- 17:30 **まとめ**

### 第2回ワークショップ概要

- ◎目的 小学校、中学校、高校の先生方が率直に語り合い、「12年間で何をどのように教えるか？」を共に考え、現場教師発のオピニオンとしてウェブサイトなどを通じて発信すること
- ◎日時 2014年2月1日(土) 13:00～18:30
- ◎参加者 全国の先生方27名(小学校10名、中学校8名、高校・大学9名)
- ◎募集方法 『VIEW21』小学版・中学版・高校版の各読者モニターへのご案内など
- ◎会場 (株)ベネッセコーポレーション新宿オフィス
- ◎主催 ベネッセ教育総合研究所「Teachers' cafe」事務局
- ◎企画運営協力・当日ファシリテーター 与良昌浩氏(株式会社もくてき)、宮崎圭介氏(株式会社スコラ・コンサルト)



## 参加した先生方からのご意見・ご感想

・学校種が異なる先生と話すことによって、「学校教育すべき根本」が見えてくるのだと感じます。その根本を、行事、教科学習、総合的な学習の時間など、教育活動に沿って考えていきたい。

(小学校/北海道)

・他校種、他地域の先生と話し合いができ、共通するものがたくさんあると分かった。教育についてこんなに熱く語る機会はまだなかったので、とても有意義だった。

(小学校/秋田県)

・先生方との前向きな議論を通して、自分にはない、新しい知見を得ることが

出来た。「子どもへの教育」という点で、私たちは同志だと感じました。

(中学校/新潟県)

・前回とテーマの関連性が高かったので、内容を深化できた。もし、テーマが変わったとしても、学校種・地域の異なる教員が集まって熟議しオピニオンづくりをまたやりたい。

(中学校/愛媛県)

・今後の社会環境の変化の予測を聞き、50年後、現在の学校制度があるのかどうかと考へた。存続させることを考えるのではなく、変化を考えなければいけないと強く思った。他校種から得られた気

付きは多く、教科指導の改善だけでなく「学校」を考える上で、とても有意義だった。

(高校/宮城県)

・100年という長いスパンで日本を見るという視点が面白く、非常に興味を持った。一般企業や行政の方も参加できるようになると、具体的な話ができるだろう。今後に期待したい。

(高校/三重県)

・いろいろな意見を認め合いながら、時間内にまとめる作業は緊張感もあったが、とても達成感があった。

(高校/岡山県)

## 各チームのオピニオン

\*全チームのオピニオンはウェブサイトをご参照ください

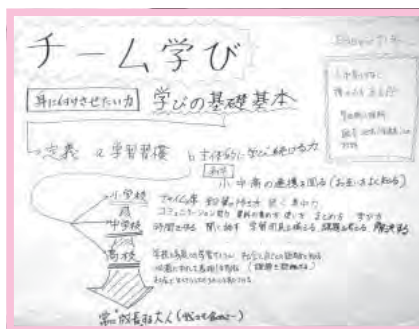
### テーマ・12年間で身に付けさせたい力を、小中高でどう教える(育む)か

#### チーム「協力」



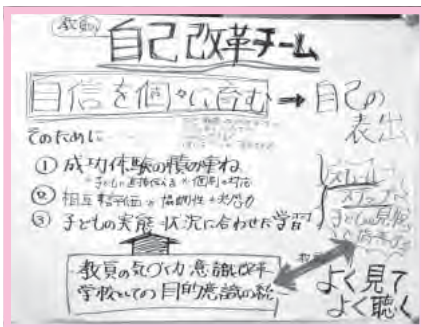
◎小中高が共通して取り組むべき指導の形として、「子どもが『夢中になれる時間と場所』をつくる」「安心して失敗できる環境(仲間と空間)をつくる」「『見通し』と『振り返り』を通して自己理解を深め、子どもの『メタ認知能力』を育む」ことの3点をあげました。これらを実現するためにも、児童・生徒参加型のアクティブラーニングへの転換が必要だと提言しています。

#### チーム「学び」



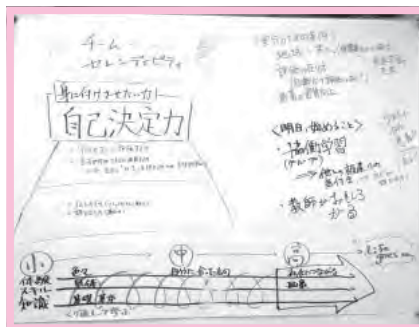
◎小中高12年間を通した学びのあり方そのものについて議論を深めました。特に、学校種を超えて育成すべき力を、「主体的に学び続ける力」と「学習習慣」に焦点化。いわゆる知識や技能の土台となる「不易」の観点を軸にして、小中高連携のあり方を改めて問い直しています。

#### チーム「教員の自己改革」



◎児童・生徒と、子どもに接する教師自身の教育観の改革に焦点を当てて議論を深めていきました。小学校・中学校・高校と、児童・生徒の発達段階がそれぞれ異なっても、見るべき指導のポイントには共通点も多いはず。「連携」の意味を、今一度問い直しました。

#### チーム「セレンディピティ」



◎たとえ、それが意図したものではなかったとしても、巡ってきたチャンスをしっかりつかみ取る力=セレンディピティ。不確実な世の中で、自分ならではの「みち」を選び、切り開いていくためには、自己決定力が大切だと考え、今後の社会の変化を見据えて議論を深めました。

#### 今後の開催について

今後の開催については、ウェブサイトまたはメールマガジン等でご案内いたします。ベネッセ教育総合研究所の最新情報も配信しているメルマガ (<http://berd.benesse.jp/mailmagazine/>) にご登録いただくか、又は Twitter 公式アカウント @benesse\_tcfe をフォローしてください。

当日の様子や今回のオピニオンの全てがウェブサイトで詳しくご覧いただけます

Teachers' cafe ベネッセ で 検索

<http://berd.benesse.jp/tcafe/>

## 2013 Vol.4特集「主体的に学ぶ力を育む—学び方の工夫で学習意欲を高める」へのご意見

このコーナーでは、編集部寄せられた読者の先生方からのご意見をご紹介します。

\*「VIEW21」小学版のバックナンバーは「ベネッセ教育総合研究所」ウェブサイト(<http://berd.benesse.jp>)でご覧いただけます。

◎主体的に学ばせるためには、子どもの内発的な意欲を高めなければなりません。そのためにさまざまな研究が進められていますが、特集の記事を読み、「当たり前のことを当たり前に行う」ことの大切さに改めて気付かされました。目標の設定のさせ方、やればできるという有能感を持たせること、熟達目標を持たせることなど、当たり前のことを日々の実践の中でどのように生かしていくか、学校の実態に合わせて考えていかなければならないと思います。  
[東京都／T小学校]

◎本校では「学力の定着」が大きな課題となっています。授業では子どもに付けたい力を明確にし、指導と評価の一体化を進めることが大事であると共通理解をし、取り組んでいます。一方で学力の両極化が問題となっています。このため、秋田県湯沢市立湯沢東小学校で行っている、9年間を見通した学習規律を子どもに身に付けさせることが、とても大事だと感じます。授業改善と共に学習規律を9年間を見通して全教職員で共有化していくことで、子どもの主体性を育む基盤がつくられると思います。  
[静岡県／T小学校]

◎今まではタブレット端末を、習熟学習や調べ学習、調べたことをまとめる道具としてしか使用していませんでしたが、東京都世田谷区立砧南小学校の取り組みから、考えを共有する場でも有効に使えると分かり、参考になりました。上手に活用することで、主体性を育むことにつながると思います。  
[北海道／C小学校]

◎本校でも「主体的な学習」を目指し、家庭学習の充実

にも力を注いでいます。発達段階に応じた家庭学習が重要だと考え、小中の9年間を見通した手引きを作成しました。その内容は復習中心であったため、岡山県倉敷市立柏島小学校の予習を起点とした「学び方」指導が参考になりました。取り入れていきたいと思います。

[愛媛県／M小学校]

◎「私を育てたあの時代、あの出会い」の中に、子どもが求めている時に適切な指導をすることが重要だという、大分県日田市立三芳小学校の渕健一校長のお母様による「そったくどうし啐啄同時」という言葉がありました。このような指導体制をつくるためにも、教職員のチームワークと協働できる校内組織づくりが大切だと、改めて考えています。

[栃木県／N小学校]

◎「Benesse 発 これからの教育」では、ICTの活用、特に1人1台のタブレットPCを活用した、宮城県富谷町立東向陽台小学校の新しい取り組みに、これからの教育の方向性を学びました。まずは、指導者が機器の特性を知り、使いこなせるように学んでいくことが、何よりも大切だと思います。  
[滋賀県／K小学校]

◎子どもが「学校が楽しい」「勉強が分かる」と話すことが、家庭との信頼関係を築く第一歩になると思います。「つながる学校と家庭の学び」の福岡県北九州市立企救丘小学校では、そのことを具体的に実践し、更に、校長先生も希望する保護者との面談をすることで、信頼関係を深いものにしていくと思います。機会があれば、ぜひ実践したいと思う取り組みでした。  
[秋田県／K小学校]

## 子どもは未来

ベネッセ教育総合研究所は、  
子どもたちの成長に寄り添う研究と  
社会への発信を通して、  
一人ひとりが学びに向かい、  
今と未来を“よく生きる”ことに貢献します。

## ベネッセ教育総合研究所

次世代育成研究室 初等中等教育研究室  
高等教育研究室 グローバル教育研究室  
情報編集室

## 編集後記

全国の小学校および教育委員会等に無償で送付している「VIEW21」小学版ですが、2014年度は3回の刊行となる運びとなりました(6月、10月、2月を予定)。冊子としてお届けする回数は限られますが、今号で紹介したTeachers' cafeのような対面の場やウェブサイトなどを通じて、学校現場の先生方からご意見を伺う機会を多く持ちたいと思います。引き続きご指導をよろしく願いたします。(杉田)

VIEW21 小学版 2014 Vol.1

2014年5月29日発行／通巻第40号

発行人 谷山和成  
編集人 小泉和義  
発行所 (株)ベネッセホールディングス  
ベネッセ教育総合研究所

## ◎お問い合わせ先

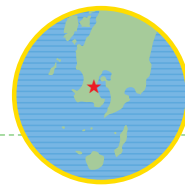
情報編集室  
〒206-0033  
東京都多摩市落合1-34  
電話 042-311-3390

印刷製本 凸版印刷(株)  
編集協力 (有)ベンダコ、丹羽三千代  
執筆協力 二宮良太  
撮影協力 荒川潤、川上一生  
イラスト協力 幸願

© Benesse Holdings, Inc. 2014

色とりどりの学びの情景

## 児童数県内一、楽しさも県内一



表紙の学校 鹿児島県鹿児島市立中山小学校



鹿児島県の無形民俗文化財に指定された中山地区の伝統芸能・虚無僧踊りを、地域の人たちが子どもたちに披露。近隣の農家での田植え体験、おやじの会の活動など、地域との交流が盛んなのも、創立128年の伝統を誇る同校ならではの



子どもたちにとって、入学式も運動会も、たくさんの仲間と一緒に学ぶことの楽しさ、素晴らしいさを実感するチャンスだ

子ども、保護者のニーズが多様だからこそ、教師集団の軸がぶれないことが大切。そこで、年に30回を超える研究授業を実施し、学力向上のための授業改善のポイント「中山授業セブン」の徹底を図る。授業参観や各種調査結果の公開など、情報公開も積極的に行う

約1200人の県内一の児童数を抱える鹿児島市立中山小学校。たくさんの子どもの集まる学校の良さを最大限に生かそうとする同校のスローガンは、「楽しさも県内一」だ。子どもの数も教師の数も多い学校だからこそ、そこに集う皆が作りみたい学校像を具体的に共有することで、多様で豊かなかわり合いが可能になり、県内一の楽しい学校になれる。そんな思いから、子ども、保護者、そして教師が大切に

すべきポイントを7つにまとめ、学校生活、家庭生活、授業それぞれの「中山セブン」として掲げる。

「楽しさも県内一」は、児童会で「どうすれば実現できるか」と議題に上げられるほど、求心力を持った言葉として大きな学校を強く1つにまとめている。近い将来、児童数が日本有数になることが予想される同校だが、視野に入れているのはもちろん「楽しさも日本一」の学校づくりだ。

過去1年間の  
特集テーマ

Back Number

2013

Vol.4 主体的に学ぶ力を育む—学び方の工夫で学習意欲を高める

Vol.3 家庭学習で学ぶ意欲を伸ばす

Vol.2 自ら表現したくなる授業づくり

Vol.1 授業で高める自己肯定感

全ての記事を、ウェブサイトからPDFでダウンロードいただけます

<http://berd.benesse.jp> または  で 

次号 Vol.2 は10月発行(予定)です